

譯があるのかね。浪「さア譯といふのは、今も申した通り、少々金子の貯へもあるから、座して食へば山をも空しで、今年はいゝ來年はいゝとべん／＼遊んで遣ひなくしてはつまらんから、今の内その貯への金子で田地を買つて、其の利得でかう氣樂に致したいと思ふのだが、弓馬槍劍の道と違つて田地の事は知らんゆゑ、それでお前を伯父に頼み相談相手に成つて貰ひたいのぢやよ。正「ふむ……それぢア貯への金で田舎へ田地を買つて引込みてえといはつしやるかな。浪「さうさ、田地をお前に任して置いてもよいが、其處は親類にならんければ、互に隔たりがあつていけんものでそれ故伯父となり甥となり、行々私に悪い事があつたら腹藏なく意見をして貰ひたいからさ、また只今お頼み申した事を叶へて下されば、お前の死水はわたしが取つて上げるつもり、何と私の様な届かんものでもよいと思ふなら、どうぞ縁を組んで貰ひ度いと、それで先生へ暫時のお暇を願つて、此處までお出を願つたのだ、どうか正介どん伯父甥の義を結んで下さいな。と和かに云ひますから、正介は感心しまして正「いやえれえ、おめえさまえれえ、たまげたな、今の若え者はえれえ所へ……田舎へ田地を買ふといふ所へ氣付くといふのはえれえよ、お前様のいふ事が本當ならえ、私い骨折つて遣るべい、憚りながら劍術だの柔術だのと云つては知んねえが、田地田畑の事ならそりやア目利だ、草深え所でギヤツと生れて、五十一に成るまで鋤鉞かついで、泥ぼつけになつて功つんだ己だ、そりやアこゝの田地はハ

ア年貢は安いが、出水の時は此の川からかう水が来て打流すから、こゝは地位は高えが其の割にゆかねえ、また茲の田地は早稲がいゝとか、晩稲がいゝとか中手がいゝとか、そんな見分なら造作ねえ、人にやア負けねえつもりだ、遣るべい、本當なら私い引受けてきつと遣るべい、宜うござえます。浪「成程田地の目利なら人に負けまい、そこを思ふから伯父になつてくれと頼んだのぢや。正「え、よ、己もお前様の様な氣が付く甥を持てば安心だよ、えゝ遣るべい／＼。

十三

傍で浪江が酒を勧めますから、正介は段々酔が廻つて、少し呂律があやしくなり、變に調子を張つてまわりまして、正介「まア浪江様安心なせえ、私今の事なら引受けるよ、だが私も練馬の赤塚の生れだが、親類身寄は皆な死絶えてしまつて、今ぢやア木から落ちた犬、なに犬ぢやアなかつた猿だが其の佛様の今年の秋は年回に丁度當るだから、どうか旦那寺へ付け届けえして法事を仕ようと思つた所だ、有難え、お前様が呉れた此金で法事して村の人をよんで御馳走をしてもまだ餘るから、残りでもまた單物ぐらゐは着られますよ、有難え、私まだ内の先生様が秋元様の御藩中で二百四十石とつて眞與島伊惣次といつた時から奉公して今年で丁度九年勤めるだ、先生は風流が好きでお屋敷を出てから

柳島へ引込み、晝え描いてござるが、あれでもまだお年は三十七だよ、あのんえ、人はねえ、誠に優しげな先生で、汝は身寄も何もねえが、縁あつて私が様なもんでも主人家來になつたのは深え縁だ、己が所に長く九年もをつたから生涯内へ飼ひ殺にして遣るつて、手前が煩らつたら己が看病して死水は取つて遣ると、なんと浪江様、有難えではねえか、それに眼のよる所へは玉で、あの御新造様がえ、お人だ、年は先生から見るとよつほどお若えが氣い付くの何のつて、貴方も弟子に成つたが、毎度先生が、浪江さんぐらゐ氣の付く弟子はねえ、あれは弟子に取り當てたつて、あんたを褒めてゐます、だが浪江様、本當に伯父甥となれば、あんたに悪いことがあれば、私小言をいふだが、其の時腹ア立てつこなしだよ。浪江「それは大丈夫ぢや、何で腹を立つものかよ、それはいよく頼みを聞いてくれるか。と浪江は前にありました猪口を盃洗でゆすぎまして、浪「さア是が改めて伯父甥の固めだと正介へ差しますから、正「有難えだ、頂くべい、おつと、またこぼれる様についてはいけねえ。と正介は快よく飲み干しますから、浪江は得たりと思ひまして、浪「イヤ早速の承知で忝けない、かう親類になれば、何も彼も互に物を隠してを致してはいけんから、正介どん私は腹藏なく何も彼もいふよ。正「あゝそれがいゝ、云はつしやい、何でも云はつしやい、已聞くよ。浪「だが斯様事を申すのは面目ないの……。正「なに面目ねえつて何がさ。浪「いや何でもないが……。面目ない、實はな、

先生のお留守の内にな、面目ないが柳島のお宅の御新造に手前くつついたで。正「え、内の御新造にくつついたつて、何がくつついたよ。浪「分らん奴ぢや、實は面目ないが、先生の目を忍んで御新造おきせ殿に密通いたしましたよ。正「エ、密通とはどうしただ。浪「これは分らん奴ぢや……。間男を致したのぢや。正「え、内の御新造と貴方と間男をしたとえ、浪江様笑はしちやアいけねえ、嘘を貴方云つてはいけねえ、あの御新造が貴方に喰つ付くなんてそんなことはしねえ、そりやア私が九年も勤めたから、御新造の氣質も能く知つて居らア、お前様の様な南瓜に、なにあの、お前様の様な色の黒い人は嫌ひだよ、そんな事をいつて己にたまげさせやうつてそれは己知つて居るから駄目だよ。浪「いやそれは手前がいふ通り、御新造が手前に惚れたのではない。正「さうだらうよ、お前様のやうな青つ髭は嫌ひだ、なに此方のこつた。浪「いや先方では中々承知する氣色はなかつたが、手前どういふ悪縁か屬根惚れたゆえ、命にかけて追つて終に口説き落したのぢや。正「え、それぢやア、お前様本當にくつついたか……。魂消たな、まアえれえ事をした。と正介も驚きました。根が正直な正介でございますから、膝を進めまして、正「まア浪江様、お前様えれえ事をやつつけたな、間男をするなんて私たまげたよ、だがして仕舞つたら、最う取返しが出来ねえだ、こゝが伯父甥の中だからいふが悪いことは云はねえ、決して……。などしねえで、……。よせよ。浪「それは手前が云はないでも

悪いことは存じてをるが、命に懸けてもと思つたおきせどの、

道で、此の節では御新造もこんなものでも可愛いと申されて……就いては南藏院の天井の畫を書いて仕舞へば歸宅さるゝ先生、その先生が歸つては、互に楽しむ事も出来ない、おきせどのも心配してをるのだが、正介頼みといふはこゝだ。正「どこだ。浪「いや頼みといふは外ではないが先生を今日連れ出して、此の浪江が人知れず殺すから、何と其の手引をしてはくれまいか。と聞きました正介、いや驚くまい事か、酒の酔も醒めまして、ブル／＼震へ出しました。愈々正介を無理往生にきたらひまして、重信を落合の螢狩に連れ出すといふ、一寸一息つきまして申し上げます。

十四

思ひがけなく浪江に心腹を明かされました正介は、齒の根も合ひませぬ程で、飲んだ酒も醒めまして體中がぞく／＼してまわりましたが、逃げますわけにもいきませんから、唯恐ろしい人だと浪江の顔を見詰めてをります。浪江は平氣で酒を飲み、盃を下へ置きまして、浪「今話した譯だから、今日私は此處から直に歸つた積りにしておいて、實は隠れて居つて待伏せをしてをるから、お前は此處

から南藏院へ歸り、此頃は落合の田甫の螢が大層よいさうでございますから、見物に入らしつては何うでござります、幸ひ浪江さまからお土産に下さつたお肴もあれば、瓢箪へ御酒を入れてぶら／＼お出掛けなさい、とよい鹽梅に勧めて連れ出してくれ、さうすれば私は道に待つてをつて、出し抜けて切つて懸るから、手前も後から助太刀をして、木刀で先生の頭をむやみにぶつてくれ、ば、忽ち落命は知れたことぢや、よいか、何うか亡いものにしては呉れまいか、何うぢやな。正介「浪江さま、お前さまは怖ない人だ、怖い人だ、貰つた金けえします。浪「こりや／＼、何も一旦遣はした……なにか前に上げた物を返すとは失禮ではないか。正「いや己金貰ひますまい……まア浪江様、よく物をつもつてごらんせえ、大恩のある、九年も御奉公した旦那様を殺すなんてえ恐ろしいことが、勿體なくつて出来べいか、あゝこんなお前さまの心意氣なら御馳走にならなきやアよかつた、己此處で物を喰つたり、酒を飲んだりしたが、一生の過りだ、あゝ情ねえ。とべそ／＼泣き出しました。浪江は弱身を見せまいと思ひますから、浪「これ正介、手前にばかり一大事を明かさせて、其様な事は出来ませんなどゝは不埒千萬ぢやぞ、よい、一大事を口外いたさせて、聞き入れなければ是非がない。そちを刺殺して置いて、手前其場を去らず切腹いたして相果てる、よいか、覺悟をいたせ。と刀を引き寄せますから、正「あゝお前様待ちなせえ、べらぼうに氣の短い人だ。浪「左様なら得心いたして

れるか。正「だつて勿體ねえそんな事が。浪「矢張り、得心いたさねば刺殺すぶんの事、よいな。

正「あゝ待ちなせえ。正「然らば承知か。正「だつて、みすく御主人様を。浪「それでは頼まぬ、斯程の一大事を明かしたのは拙者の見込み違ひ、よい、それへ出い。と刀の鯉口を寛げますから、

正「待てよ、待てと云つたら待たつしやい。浪「左様なら得心するか。正「あゝ厭だと云へば殺すつて云ふし、うんと云へば、御主人様を殺さなければ成らぬ、あゝ情ねえこんだ。浪「其代り是を仕遂

げてくれれば、骨は盗まぬ、澤山禮は遣はすからやつてくりやれ、正「仕方がねえ、やるべい、やりますよ。浪「然らばよいな。正「ようござえますといふに、私仕方がねえ、やるよ、だが、浪江様、

先生は素晴らしい劍術の名人だよ。浪「いや劍道に勝れてをるといふ事は、おきせ殿から聞いてをるからよい、假令名人でも、また此方には計略がある、これ一寸耳を買せ。正「え、何んだつて、あゝ

くすぐつてえ。浪「よいか。と何か暫く嘯きまして、正「そんなら私供をして行くのか。浪「私はな、落合の田島橋のなだれに小坂がある、其左手は一面の薄で、赤楊が所々にある小高い丘だから、

其のおひ茂つた薄の中に隠れてをつて、先生をやり過ぎて竹槍でたゞ一突きにいたす、左様いたしたら貴様も後から眞鍮巻の木刀で力に任せて頭を殴れ、さうすれば幾等手利きだといつても、不意を討

たれては、遅れを取るものぢや、よいか、其の代りに只今も申した通りに、褒美として、二十兩其方

に遣はすぞ。正「なに、金いりましねえ、五兩貰つて人を殺せといふもの、二十兩べい貰はうもんな

ら何殺せといふか知んねえ。浪「たはけた事を申すな、金子を遣はしたつて、先生の外に誰を殺すも

のか。正「何いゝがね、だが間違へて、お前様私竹槍で突いてはいかねえ、提灯を持っては私旦那

より先だから。浪「いやく螢を見物に行くのに、提灯を持って参るものがあるものか。正「はアそ

れぢやア暗闇かね。浪「今夜は朧月であらうと思ふから誂へ向きだ。正「よい仕方がねえ、厭だとい

やア殺すといふから仕方がねえ、勿體ねえが遣つつけい。浪「然し手前此の場は受合つて、寺へ歸

つてから裏歸りをいたして、万一手違ひにでも成る時は致し方がないから、最早悪事も露顯いたせば、

本堂へ踏込んで貴様を初め切つて切つて切り死を致すから左様思へ。正「えゝ又切り殺すつて、よいよ、案じねえがいゝ、大丈夫だ、己九年も奉公して忠義を盡したのも無駄にして、やるべいと受合ふ

からは案じねえがえゝ。浪「さういふ心なら安心ぢや、さアもうそれでよいから一杯飲まんか。正「も

うゝ酒も咽喉へは通らねえ、それぢやア此の五兩は貰つて置くよ。と威されました正介は金子を懐

中して、土産の折詰を貰ひまして、そんなら斯うかうゝいふ計略だと示し合せまして、此の花屋を

立出で、南藏院へ歸つて参りました。

十五

人間は餘り不正直過ぎましてもいけません、輪をかけた正直でも困りますもので、悪漢の浪江に腹の中まで見透されました下男の正介は、請合ひは請合つたが、心に進みがありません、が厭と云つたら切られやうかと命の惜しいのが先に立ちますから、濟まない事とは思ひますが、落合へ主人重信を連れだす一件を斯うくせよと悪智慧を教へられて、土産の折詰を提げまして南藏院へ歸つて来ました。正介「先生様、今歸つて来ました。重信あまり暑さが厳しいから、奈良圍扇をもつて縁端に涼んで居りましたが、此方へ参りまして、重信「お、正介か、浪江はいかゞいたしたな。正「へいあの浪江様はあの急に御用が出来て歸りますから、此の肴を先生へ土産だといつて上げてくれつて、急いで歸られました、嘘ちやアねえよ、歸つた振して道に待伏せ。重「何ぢやと。正「いえ宜しくと云つて歸らつしやいました。重「お、左様であつたか、何か是は御馳走ぢやな、これは氣の毒千萬な、はあ、馬場下町の花屋か、貴様も馳走になつたと見える。正「はア私イも大層馳走になりましただ。

重「それに致してはさつぱり酔はん。正「酔ひましねえ、どうして酔はれるものか。重「いつも手前は一合も飲むと、大分元氣が出るのに、何故今日は酔はん。正「酔つたけれど醒めて、いえ己今

日は心持が變痴氣で、いつもの様に酔ひましねえ。重「それはいかんな、あの浪江位な氣の付く男はないの、私が菓子が好きゆゑ、何か口に合ふ様なものと云つて先刻金玉糖を澤山呉れたが、また魚が不自由であらうと思つて何か焼魚に付け合せ、どうも親切な男だのう正介。正「へえ誠に親切でござえます、……あの先生、浪江様がさう申したつげが、あんまり先生が凝つて夜なべ迄なすつては却てお體の毒になりますだから、たまには保養をなせえつて、己に何でも先生様ア連れ出せつて申しました。重「なにそれではあまり凝つて畫を書いては毒だから、ちとぶら／＼歩行でも致せと申したのか。正「さうさ、それだから己に連れ出せ、なにさ、先生様今夜あたりはめつほう暑くつて蒸しますから、何うだらう、落合へ螢を見物にお出でなすつてはどうでございます、己お供しべい。と浪江に教はつた通りに云ひますから、重「いかさま、とんと失念いたして居つた、豫々落合の螢狩がよいと申す事は、朋友からも聞き及んでをるが、それは餘程見事ださうぢや、他の螢と違つて大粒にして、その飛び交ふさまは明星の空を亂れ飛ぶかと思ふばかり、又地に伏す所はきら／＼として草葉の露と怪しまれ、恐らく江戸近在にはかやうな螢狩はないとか申す事ぢや、三つ子に淺瀬を聞いたと同じ事ぢや、貴様に云はれたので思ひ出したよ、もう日暮に間もないから、幸ひ浪江から貰つた折を先へ參つて開くとして、宅から持つて來てをる瓢へ少々酒を入れて出掛けやう、正介支度をしてくりや。と重信は

着物など着替へまして身仕度をいたします。正介は腹の中で情ない事だと思ひますが、辨當なんぞを拵へまして内玄關へ雪駄を廻し、自分は折詰と辨當箱を振分荷物のやうに致しまして肩へかけ、半疊敷許りの島段通を用意して、瓢をもち木刀を差しまして、「さア先生様参りませう。重信は黒紗の紋付の羽織に玉子色の越後縮の帷平、淺黄獻上の帯を締めまして、少し長い脇差一本で、鼠小倉の鼻緒の雪駄を履いて、正介を供に連れまして日暮より出掛けました。御案内の通り、落合と申しますのは、井の頭の辨財天の池から流れます神田上水と玉川上水とが、此處にて互に落合ひ一つになりますから、名でございまして、随分廣い村でござります。丁度、寶曆二年六月六日の事でございますから、宵闇だ、空は雨氣をもつてをり、晝の中から蒸暑いから、今に雨でもかゝりさうな空合で、雲行が少し暴うござります。重信は話には聞いてをりますが参つたのは初めて、成程螢の大粒なのが彼方此方へ飛び交ふさまは實に見事で、重「正介、よい景色ぢやな、あの粒な螢が、あれ／＼飛び交ふ有様は晝には掛けぬの。重「本當に左様でござえます、あゝ南無阿彌陀。重「これ何故念佛を稱へるのだよ。正「へえ私い螢が人魂のやうに見えてなんねえ。重「馬鹿を申すな、兎角そちは浮かんや。餘程鹽梅が悪いと見えるな。重「はア鹽梅が悪いつて、己よりお前様が。重「何、手前よりお前様とは、この重信は何所も悪うはない。正「今悪くなくつても、今に悪く成るべし。重「えゝなにを申すか、

可笑しな奴ぢや、こゝいらへ段通を敷け、丁度よい所ぢや。と下戸ではございしますが、重信は頻りと瓢の酒を飲んで居ります。

十六

重信「浪江から呉れた肴は中々新しいな、何うぢや正介、貴様はいつも飲める口ぢやアないか、一つ相手を致してくれ。と出しますが、正介は今にも浪江が出て殺すだらうと思ひますと、中々酒を飲む所ではございせんから、正「有難うござえますが、何んだか今夜胸が苦しうござえますから止しにしべし、貴方もう澤山上り、もう上り仕舞ひだから、なにさ先生様、私い長い間貴方の所へ奉公ぶつて、今年で九年に成るだア、誠にこれまで御恩に成つて、やれ正介、それ正介とやれこれいつて下すつた事を考へると、私い涙が零れてなんねえ。重「これ／＼何を感じて左様な事を申すのぢやか知らんがそんな事はよい、申さずとよい。正「それでも、お前さまが息のある、なにさ、いきませうい寺へ。重「おゝ歸れと申すのか、成程、今日は晝間からむし／＼致して暑かつたのは、空へ雨を持つてをるかであらう。と空を見上げまして、おゝ大分空合が悪くなつて参つた、降らぬ内に歸宅致さうかな。正「歸らつしやるが宜え、雨が降ると、こゝらは辻つて歩けねえから早く行きませう、南無阿彌陀佛

くく。重「え、また念佛を稱へるよ、變な奴ぢやな。と支度をいたします。正介は喰ひ散らし
ました折などの蓋を致して持つてゆく積りと見えますから、重「こりや、折などは其處へ捨て、参
つてもよい、もう中には何も有りはしない、段通をはたいて、泥が付きは致さぬか、あゝ雲が大分途
切れて、おゝ月が顔を出したな、これでは降らんかも知れぬ。重信はあまり不慮は酒を飲まぬお人
でございますが、正介が相手をしませんから、手酌で遣つて思ひの外酔ひましたから、一步は高く、一
歩は低く、ひよろ／＼しながら、重「あいよい心持ぢや、えい。と田島橋を渡りまして、なだれに
参ると小坂がござります。此の傍らは一面の藪で薄が所々に交つてをりますが、まだ時候が早いから
穂が出ませんで、櫟林が片側で、夏草が茂つて居り、いろ／＼な虫が啼き連れて物凄うござります。
正介は彼の浪江がこゝらに隠れてゐるかと思ふと足が進みません「南無阿彌陀佛くく、と口の内
で念佛を稱へて居ります。重「これ正介、早く來んか、えい、兎角そちは遅れるの。正「へい足が
痛えから歩けましねえ、旦那様貴方は先だ、正介は供だから後だ、間違へちやヤなんねえよ。重「何
をつまらんことを申す。正「先生は先で正介は後だよ。重「あれまた左様な事を、變な奴ぢや、今夜
はどうか致してをる様子ぢや。と行過ぎます。豫て藪の茂みに忍んで居つた磯貝浪江は、遣り過した重
信を目懸けて竹槍をもつて突掛けました。重信は太股を突かれましたが、流石は神影流の名人でござ

いますから、うんと云ひさま尻餅をつきながら腰の脇差をすらりと抜きまして、重「己れ狼藉、何もの
ぢや、姓名も名乗らずに卑怯な奴め。と正眼にびたりとつけました。此方は手早く竹槍を捨てまして
一刀を引き抜き、振り上げましたが、正眼に付けられたので、打ち込むべき隙がございませんから、
あつと／＼致して躊躇うてをります。重信は手負ひながら、重「正介、正介はどこに居る、助太
刀を致さぬか。浪「こりや正介、手傳へく。と息を切らして申します。困つたのは正介で、正「へ
い。……重「狼藉者ぢや、正介助太刀いたせ。浪「正介、約束ぢや、手傳へ。と困りましたが、浪江は
手拭をもつて面體を隠してをりますが、正介の方を正面に向いてをりますから、睨みつけて居りまし
た。重信は後向でございすから見えません。正介は浪江が睨んで居ますから、若し手傳はなかつた
ら、後でどんな目に逢ふか知れないと思ひますから、正直者ゆゑ、大恩受けた御主人で濟まないが、
仕方がないと觀念致しまして、目を塞いで木刀を振り上げ、後から重信の頭を一生懸命に、正「御免
なせえ、免して下せえ。と無暗擲りといふやつに打ちましたから、重信は後に敵がないと思つた所を
不意に打たれました故、重「己は正介か、うん己は。と振向く所を浪江は重信の足を拂ひました。あ
つと蹴めく重信を乗懸かつて横手なぐりに肋骨から腰の番に懸けまして深く切り込みましたので、う
んと俯伏せに倒れ、虚空を掴んで、うむ……。浪「貴様は早く逃げて歸れ、豫て申し含めた通りに致

せ。正「浪江さま、遣らしつたね。とぶるぶる震へてをります。浪「もう是でよい、早く〜」。と急ぎ立てられました正介は、これで年が明けたと思ひますから、辨當箱も飄箆もそこらへ落し、足に任して逃げたの逃げないのではございせん。とう〜南藏院の一町半ばかり先まで逃げて行きましたが、心付いたから又後へ歸り、締つて居ります門を破る程叩きました。

十七

毀れるやうに門を叩きますから、何事かと思ひまして、所化と小坊主が眼をこすり〜貫木を外しまして潜の扉を開けて、所「誰だえ。正介「私だよ、正介でござえます。所「何、正介さんか。と正介は飛込む様に内へ這入りまして息を切つて、正「随連様か、大變だよ〜。所「これ正介どん、大變とは何事だえ。小坊主「正介どん、お前草履を手に持つて、それ方々が泥だらけだ。正「いや泥だらけなんぞは構ひましねえ、大變…た〜大變、先生様が道で狼藉者に出逢つて、こ…と口が利けません程息を切りました。正「もし水を一べえ下せえ。所「今あげるが、何だ先生が道で狼藉者に出逢つたつて。小坊「さア水をお上り。正「え、有難え、狼藉者が道に出逢つて殺された先生を。所「何を其様に迫き込んで…冗談をいふのだよ。正「冗談どころか、先生様が殺されたア。所「それが冗

談だ、まア氣を落付けて居なさい、不斷先生がよく仰しやつたつて、正介は正直者で影日向なく働いてよいが彼奴其代りに酒を飲むと、主人も家來も見境のなくなるには困ると仰しやつたが、お前大層今夜は酔つて居るね。小「酔つぱらつて居ると見えて、正介どん、お前の顔が青く成つて居るよ。所「お前喧嘩でもして來たのかえ。正「イヤ己ぢやアねえ、先生と狼藉者と斬り合つて、落合の田島橋のなだれで。所「それがさつぱり分らない、先生は最う疾うにお歸りになつて、本堂で夜なべをしておいでだ。正「え…先生様が歸つたつて、其様な嘘を云つちやアいかねえ。所「何嘘をいふものか、それだからお前のいふ事が變なのだ。正「え、たまげたね、先生様が本當に。所「疑るなら本堂へ行つて見なさい。正「え、それちやアほんたうに、早えな、もう化けて來たか、あ、南無阿彌陀佛〜と手合せまして念佛を稱へて居ります。所化も變な鹽梅でございますから、正介を伴ひまして、まア此處から見なさい。と云はれました正介は慄然といたしました、若しや己が眼をねぶつて先生の後から夢中で擲つたから、間違へて浪江様を擲つて、あの場で打殺してもしたか知らん、左様ならば有難いが、何卒先生が助かつてござれば宜いが、然し浪江さんが私へこれ〜頼みました、と譯をお話し申したら直にお暇になるだらう、どつちにしても、あ、飛んだ事を遣らかした。と所化の隨連が見ると申しますから、怖々ながら入り側の所から本堂の方を覗きますと、重信はいつもの様に障

子屏風を立廻しまして蠟燭をかん／＼と照し中腰になつて筆を持ち、何か描いて居ります影が映りますから、え、正介は驚いた、齒の根も合はず、悔りいたしたから聲も出ません。所「あれ屏風へ影が映るではないか、先生はいつものやうに晝は氣が散つていかん、精神を罩めるには夜がよいと仰しやつてあの通り、それを道で狼藉者に出逢つて殺されたなんかと……詰らない事を云つてはいかん、人を馬鹿にした。正介は餘り不思議で成りませんから、ぶる／＼慄へながら、所謂怖い物見たさで、障子屏風へ指の先へ唾をつけて穴を開けて……中を覗いて見ますと、今菱川重信といふ落款を書き了りまして、筆を傍へ置き、印をうんと力を入れて押した様子、正介は重信の姿を見ますと何所となく瘦枯て物凄いからがた／＼慄へて……重信は印を右の手に持ちながら、此方を振り向きまして重「正介、何を覗く。といった時の一聲は何となく響き渡つて、正介が腸へ沁みわたりますから、正「あつ。と云つて其所へどさり倒れました。この途端にかん／＼いたしてをつた蠟燭の灯は、一陣の風につれました、ふつと消え眞暗がりになり、正介が倒れましたから、所化の随連も小坊主も悔りしまして我知らず大聲を上げたので、何事が始まつたかと和尚様も寺男も飛んで參つて見ますと、正介は打つ倒れてをる様子で、所化も小坊主も呆氣にとられて居りますから、先ず正介を抱き起して介抱し、何うしたのだと聞きますので、正介は重信が落合の田島橋で狼藉者の爲に非業の最期を遂げた事

を言葉短く告げましたから、和尚様を初め聞き居つた人達は悔りいたしました、重信は本堂に先刻歸つて来て夜なべをして居ると聞いて居りますから、何しろ早く本堂へ行つて見るがよいと、手燭洞雪などを持つて行つて見ますと、今迄歴々姿の見えました重信が形は消えてをるが、昨日まで描残して出ずすにをつた雌龍の右の手が見事に描き上つて、然も落款まで据わつて、まだ／＼生々とした朱肉も乾かず龍の晝も限取の墨が手につくやうに濡れて居りますのは、正しく今描いたのに違ひありませんから、お住持を始め一同驚きまして、暫し言葉も途切れ程で、皆々溜息を吐いて居りました。

十八

正介が委細の話を聞きましてお住持は驚きまして、直に村方の世話人へ知らせます。提灯を點ける六尺棒を持つて来いなどと、喧嘩過ぎての棒ちぎりとやらで、上を下へと騒ぎまして、正介を案内にして六七人弓張提灯を點して落合へ行つて見ますと、無慙や正介が申した通り、重信は朱に染まつて倒れて居ります。お住持はそこは商賣柄だけ直にランアボギヤアを遣らかします。正介は主人の死骸を見るにつけても己が手傳つたと思ひますから慄へながら口の内で念佛を稱へて居ります。世話人「まア飛んだ事だつた、可哀さうに、えいお人だつた、お年は三十八だ、なに七だつて、やれ／＼、だが

遠が武士、お武家様だから死んでも刀へ手を懸けて放さねえのは感心だよ、なに頭に擲たれた痕があるつて、あゝ酷く何かで擲つたか、憎い奴だ。などと云はれます度に、正介は胸へ釘を打たるゝ思ひで、まア何しろ死骸を用意して参つた棺桶へ収めまして、南蔵院へ一時引取りましたが、舊幕府の頃でございますから、此の由を書面に認めまして、お奉行所へ訴へ御検視を受けるといふ手數で、柳島へは四五人で此の由を知らせますと、例のおきせは悔り致したの何のと、自分が夫の留守に悪い事を致して居りますから、所謂疵持つ足で、いろ／＼な取越苦勞を致して涙に暮れてをります其の内、所謂御検視も済みましたので、重信の死骸を高田柳島へ引取りましたが、六月六日といふ、土用の入りから三日目だといふ暑さでございますから長くは置けません。おきせは泣きの涙で、まづ菩提所へ野邊送りを致しましたが元より夫を殺したのは誰が仕業ともかくれ分りません。浪江も己が重信を殺したとは云ひ兼ねますから、口を拭いて、早速人が参つたから駆付けまして空涙を零しまして、何れ私わたくしが師匠の敵は草を分けても尋ねて眞與太郎様に討たせます、私わたくしがお助太刀をいたす。など、瞞かして、俱に葬式の世話をして居りましたが、待たぬ日は來ますもので、日柄が立ちまして早くも三十五日も済み、或日の事でございますが、撞木橋の磯貝浪江の宅へ彼の地紙折の竹六を招きまして、馳走などいたして、浪江なみのさて、竹六たけむすさん、今日お前をお呼び立て申したは別の事ではないが、私

もお前の世話で、一旦師匠と致した重信先生も、今度不慮な事で横死を遂げられ、申し様もない譯ちやが、お前も知つての通りまだお新造が二十四で入らつしやるから、今から後家を立てるの、尼になつて夫の菩提を弔ふなどと仰しやつても、世間でそれは許さぬ、私わたくしが思ふには何うかあの先生の遺子の眞與太郎様を可愛がる様な氣の優しい人を入夫にして、眞與島の家名を相續させたいと思ふがお前はまア何う後の事を思つておいでか、腹藏なく聞きたいのだが、まア竹六さん何う思ふえ。と横着者の浪江なみのでございますから竹六たけむすにお前様が宜いと云はせやうといふ計略、竹一たけひと成程、今度の一件では私わたくしも肝をつぶしましたが、あの先生があゝいふ非業な死にやうなんぞをなさるとは、私わたくしア天眞様てんまさまが聞えないと私わたくしア思ひます、だが仰しやる通り御新造がまだお若いし、好い御器量ときてゐるから、何うせお獨りで居やうと思召したつてさうはいかない、もし御馳走になつて……いえ是れまで私わたくしア貴方あなたには色々頂戴した物もあり、別段に御懇命を頂いた、それで云ふのちやア決してございせんが、いつそ他から御入夫をお入れなさるなら私わたくしア貴方がいゝ。浪江なみの冗談を云つては相談にならないよ、竹一たけひとえ、冗談、何で竹六たけむす冗談を申しませう、御酒を頂戴致したつて、まだこれで二銚子、まだ酔ふといふ所へは行きません、白面でございますよ、斯う申すと可笑いが、御新造様だつて貴方を常不斷お譽めだ、貴方ならお二つ返事。浪江なみのイヤ私の様な届かない者を、嘘にも然う云つてお呉れのは嬉しい

が、それは私がいつそ見ず知らずで、門弟でなければよい、私が眞與太郎様がせめて十五に成る迄後見を致して成人を待つて引下るが、何うも弟子師匠の間柄では何だか其所が變でな。浪「なに變で、そりやア貴方お氣が咎めるといふのだね、貴方が坊ちやんをお可愛がんなさるから、御新造大悦び、また貴方が先生のお跡目をお繼ぎなされば此の竹六も大悦び、大變に都合がよい。浪「イヤそれは止しな。竹「イエ止しません、私「が此事は引受けて致します、人の事は人がお世話を仕ないではないけません、まア私に黙つて……お任せなさい。と此方から頼まないでも、竹六が頻りと世話をしやうといふ様子を見まして、心中に占めたと思ひました。

十九

竹六が請合ひましたから、仕済ましたりと心中に浪江は笑を含み、浪江「それではお前に任せるがまア師匠の跡を弟子の私が繼げば、冥加に叶つた事だから首尾能くこれが整へば禮を致すよ、竹六「なにお禮などは決して頂戴しません、平生御恩にある此方様の事何造作もない事で。浪「いえ／＼それはそれ、これはこれだから、少しだが十兩進ぜるよ、それにそれ不斷お前が譽めておいでの羽織ね。竹「へ、あの絲織のですか。浪「絲織の萬筋の方。竹「え、あれを下さるつて。浪「あれをお禮に上

げるつもりさ 竹「頂戴しては濟まないが、下さる物なら夏も小袖、下さるならそれに越したことはございせん。浪「それでは何うか頼むよ。竹「宜しい、よろしうございます、細工は流々仕上げを御覽なさい。と請合ひまして竹六は暇を告げ、直に柳島のおきせの所へ遣つて來ました。竹「へい御免遊ばせ、私で、へい、竹六で、御機嫌よう。と内玄關から上りまして、葭戸を開けて這入ります。おきせは眞與太郎を今寝かしつけて居りましたが、竹六が參つたと聞きましたから起返りまして、きせ「お、竹六さん、ようお出でなさいました。竹「へエ御新造、次第にお淋しういらつしやいませう、先日はお門多し中を、私へ迄お志の蒸物を頂戴致しまして、何ともはお禮の申し上げ様もない。きせ「いえ誠に粗末な物で、最う手がないものですから、何かと行届かないで、それにお前さんには葬式から引續いて、色々まアお使い立て申して碌々お禮も致さないで。竹「いえ／＼どう致しまして、お禮所ではございせん、毎度お手傳ひに上るのは宜いが、後で頂くと襪襦を出して、いつでもお花どのの御厄介、いえ頂いてはいけません、御酒を頂く者は人間の屑で。きせ「まア其所は敷居越ですから、まア此方へまアすつとお這入りなさい。竹「いえもう是で宜しう、坊様はお寝んねで大人しい、はお茶を。きせ「悪いので只今いれますよ。竹「いえもう是で宜しう、坊様はお寝んねで大人しい、實に坊様のお顔を見ますと思ひ出しますよ、先生様の事を……。きせ「もうこれが切せて五つ位でを

つたら、少しはお父様のお顔を覚えて居らうかと存じますが、まだ當年生まれましたばかり、親の顔も存じないかと思ひますと、つひ胸が一杯に……。竹「イヤこれは飛んだ事を申してお思ひ出させ申しました、いえ是は皆約束事で、何うして貴方まで〜是より酷い泣を致す人がございますよ、まあお諦めが肝腎で、お嘆き遊ばすと却つて佛様のお爲によろしく有りません。とおきせが涙を泛めましたから、こいつは飛んだ事をいつたと、これから世間話を面白く、ちよつと封間も遣るといふ竹六でございませうから、漸々おきせが元氣恢復いたしました。竹「え御新造、私が今日出ましたのは、實はちと御相談が有りまして。きせ「私へ御相談とは何の事で。竹「いえ外ではございせんが、かう申すと叱られるか知れませんが、まだ日柄も立たないのにそんな事をと、叱られたらそれまで、いえなに此方様のお跡目のことで、え、貴方様だつてまだお若く入らつしやるし、殊に坊様といふ御心棒がお残りで、田地や旦那様が御丹精遊ばしたお家作などもございませうから、月々のお世話を焼く男の手がなくなつては、そりやアお困りなさるよ、然しそれは人をお頼みなさるとした所が、他人といふ奴は一寸は好いが、不實が多いもので、それより私は貴方のお話相手……いえお後添をお貰ひ遊ばすのが、へえ……一番お家のお爲によいかと思ひます、そこでこれを貴方様へお勧め申しに上つたので、ねえ貴方。とそろ〜と勧めかけました。おきせは涙を拭きまして、きせ「誠にお前さん御親切に左様

おつしやつて下すつて。竹「へ、なに御親切と仰しやつては痛み入るわけで、きせ「いえもう本當ならば左様いたすのが、順當かも知れませんが、旦那もあゝいふ非業な御最後を遊ばしましたし、後へ私獨り残りしましたなら、左様致してもよいが、瘦せても枯れても男の子の眞與太郎が一人ございませうから、是を大きく致して成人を待ちまして嫁でも取りまして、此の眞與島の跡目を嗣せませう私了簡で、私はもう生涯後家を立てまして旦那の菩提を弔ひますのが望みで。と後は涙に聲を潤ませ、何か口の内で云ふが分りませぬ。竹「な、成程、それは御貞女で、竹六大感心、さうなくつてはなりません譯で、だが失禮乍らお俐口でいらつしやつても、またそこが御婦人のお心が狭い、え、何故だと云つて御覽じませ、坊ちやまがお嫁をおとり遊ばすやうに御成人なさるのは、そら今年が御當歳で、それからお二つ三つ四つ……お十七八にお成り遊ばしても、まだ貴方はお四十ですよ、その長い内には男でなくつてはいけない御心配があるもので。きせ「いえ、それは承知して居ります。

竹六「そりやア御承知でせう、御承知で入らつしやいませうが、そんな御苦勞遊ばさなくつても宜いので、竹六決してお悪い事はお勧め申しませぬ、三十でもお越し遊ばしたらまだしも、お廿四位で後

家をお立てなさるのは無駄だ、無駄と申しては済みませんが、却つてよろしくない、私は一本槍にお後へお入れ遊ばして、お家のお爲といふのは浪江様だね、あのお方位萬事にお氣の付く御發明な方はないね、それに坊ちやまを第一可愛がんなさるから、これが何よりで、だがお弟子だからどうも。きせ「ほんたうに浪江様なら……それでもまさかあのお人を……」竹「へ、なに浪江様をえ、貴方……まさかあのお人……へえなあに、少しは思召しが、いなえに私がお勧め申す位ですから、先づ斯う見渡した所では、あのお方様ならお互にお心もお知り合ひなすつて入らつしやるから、出す入らずでそれに元が谷出羽守様の御家來で百五十石も取つたお方で。と頻りに浪江の事を褒めそやしまして勧めます。如才ない悪黨の浪江でございますから、おきせとも豫て話が出来てをる事で、互に相談づくでは他人の口も面倒ゆゑ、竹六から勧めさせて、人が寄つて集つて入夫にさせる様に仕懸けますのだから、おきせも、兎も角も正介に相談してお返事をしませう、と十の物なら、八九分迄承知しさうな鹽梅ですから、竹六は糸織の羽織と十兩占めたと思ひ、悦びまして其日は歸りました。おきせは此事を正介に相談しますと、豫て落合で自分の主人まで手傳つて殺した事のある正介でございますから、それは悪いとは云へない、「それは至極よい、旦那様もさうなすつたら、草葉の蔭でさぞお悦びでござりませう。と生返事を致しますから、外に親類縁者のない事で、忽ちこれに話が纏まりまして重信が

四十九日が済みますと、直に人滅しだといふので、永く居つた下女のお花を暇を遣りまして、竹六が媒人なり、橋渡しなりで、婚禮などいふ儀式をしませんで、所謂するするべつたりにとり、とう／＼浪江が乗り込みまして、おきせの後添になり、撞木橋の家から荷物と柳島へ運びなど致して、重信が貯へて居りました、結構な道具から田地までを、手も濡らさずに我物に致したとは中々な悪者で、おきせも亦、現在本夫を殺した敵とは知らずに、入夫にいたしましたのも、これが所謂因果同士で、たい心持の好くないのは正介でございます、おきせと浪江が陸じいのを見ます度に、心の裡で念佛を稱へて、ポロリ／＼涙をこぼしてをりますが、最初悪事に加擔をいたしたから、暇を呉れと云つても、そんなら遣らうとは云ふまい、と云つて向からは世間へ行つて喋べりでもいたされては身の上ですから、尙暇にはしない、一生飼殺にされるかと思ふと、針の筵に座します心地で、面白くなく其の年も暮れまして、寶曆の三年となりました。何事も無い。丁度七月の初旬から、おきせが酸い物が欲しいと云ひまして懐妊の様子。九月頃には乳が上つて仕舞ひましたから、まだ二歳の眞與太郎が母の乳が出ませんから、むづかりまして夜なども碌々寝ませんで、ビイ／＼泣續けでござりますから、浪江は煩さくつてたまりません。或る日の事で、浪江は正介を連れまして、龜井戸の巴屋といふ料理茶屋へ参りました。不斷ちよくちよく参ります家ですから、奥の離れが好いよ、彼處へ御案内を申しな、な

ど、取扱ひが宜しい。浪江は誂へ物をいたし、猪口を取上げまして正介に差し、浪「正介まだ中々残暑が暑い。正「へえまだ暑うござえます。浪「暑い時は酒を飲むと尚暑くなるだらうなど、下戸の人は云ふがの、それはさうよ、酒を飲むと腹内へ燃える物が入るのだから、温かく成る道理で、随分熱するが、然し好い心持に酔つてをる内は、唯暑さを忘れるのは不思議だ、さア今日は一つ飲むがよい、なにそんなに堅苦しく畏まつて居るには及ばん、よいから膝を崩せ、なに暑い、暑ければ後の唐紙を取つて、さア胡座をかけ、だが正介。正「へえ。浪「一年経つのは早いものだな、去年の六月六日の夜、それ落合の田島橋で、師匠の重信を貴様が助太刀で、なに大きな聲だ、なによい、誰もまわりはせん、首尾よく殺して、只今ではかうして眞與島の跡を繼いでをるが、手前も知つてをる通り、とうとう我が胤を宿しておきせが懐妊いたした、それにつけて手前に折入つて頼みがある。正「ええ、あんだ。

二十一

浪「何でもあゝいふ餓鬼が成人致すと、きつと己を親の敵だなど、覘ふに違ひない、何うも白眼目が一通りでない、己は氣になつて成らぬから、眞與太郎を人知れず手前殺しては呉れまいか。正「え、

またかい……いえ浪江様、そりやアお前さまいけましねえ、能く物をつもつて御覽じませ、まだ二つやそこらのお子で、乳い飲む小せえ坊ちやまが、お前さまの顔を覗むの、怖え顔をして見るのといふ事があるものですか、親の敵い討つべいななどといふ念があるもんぢやアねえ、そりやアお前様が氣にとがめるのだ、止さつせい、可哀さうに。浪「そりやアな、あゝいふ事をしたから、此方の氣でさう思ふのかも知れんが、梅檀は嫩葉より秀しとやらで、あの餓鬼は中々利發で二歳や三歳の常の子供とは違ふよ、嫩葉の内に刈らずんば斧を入るゝの悔あり、あれを今のうち亡きものにせんければ、己が枕を高く寝られんよ。正「なに千段巻の槍で遣れつて。浪「いや、只今申したのは、ありやア引事を申したのぢやが、何うか旨く餓鬼を遣つてくれ、頼むよ。正「いや、いけましねえ、堪忍して下せえまし、あの可愛らしい坊ちやまが、お前何うしてそんな事が出来すものか。浪「それではどう致しても厭だと申すか。と見相を變へますから、正「あれ浪江様、またお怒んなさるかえ。浪「怒りは致さぬが、それでは何ぢやな、眞與太郎が成人致したら、其方は親の敵は此の浪江ちやと申して己を敵と覘はせ、助太刀をいたして討たせでもする心か。正「あれ駄目だよ、何で己そんな事をしますべえ。浪「いや汝は正直者だから、去年落合の一件に餘儀なく加擔は致したが、心は元の主人へ忠義を盡す積りで、此の浪江を敵と覘ふに相違ない、よし又それでなくつても、一度ならず再度まで、斯る

大事を明かして置いて、得心いたさねば、必ず後日他へ口外いたすに違ひない、さすれば我身は安穩には居られぬ、不便ぢやが。と傍にありますが、差料の刀を引き寄せまして、鯉口を寛げますから、正「あこれさ、待つてくらつしやい、あゝ氣の早えお方で、おめえ様は怖え。浪「一旦悪事に加擔いたした其方ゆゑ、何も殺したくはないが、申す事を聞かぬば是非がない……正「あれさ、まア待ちなさい、氣の短けえ人だ。浪「然らば眞與太郎を何して呉れるか。正「え、情ねえ、己頼まれべえ、やりますよ。浪「それではやつてくれる氣か。正「己やるよ。と泣聲を出します。浪江は得たりと思ひますから、刀を元のところへ置き言葉を和げまして、浪「それでは聞き入れて呉れるか。正「否だといやア命い取るといふから、仕方がねえやりませえ、だが坊ちやまを何うして殺すだア。浪「それは斯うぢや……手前も知つてをる通り、おきせが先達てから我が胤を宿して懷妊いたしたゆゑ、乳がなくなつたので、餓鬼めがビイ／＼晝夜とも泣いていけぬ、どうか乳母を置いてくれといふから、それはいけない、氣心の知れぬ者を置いては、眞與太郎が可愛さうだ、寧ろ慥なところへ里にやるのがよい、と己が傍で申すから、手前それは丁度よい、御新造坊ちやまをお里におやりなさるなら、好い所が有ります、田舎へおやんなさい、田舎は江戸と違つてのんきだから、達者にお育ちなさる、そりやア半年もたちやア、クリ／＼ふとつて大丈夫にお成んなさる、と傍で勧めるのぢや。正「はアそれ

から。浪「手前を不斷から正直者と思つてをるから、本當の事に思ふ、所で其の先は、私の妹の縁付いてをる先の親類とかなんとか申して、直近在で鳩ヶ谷といふ所で大盡でございます、田地の二百石も有つて馬の十疋も有る、中々金持で、其處の嫁様が此の間初産をした所が、男の子であつたが虫が出て死んだ、乳は澤山あるし奉公人の二三人も使つて居りますから、坊ちやまはお合せだと、手前が本當の様に申すと、おきせは悦んで承知致すに違ひない。正「はアそれから何うします。浪「尤もおきせは眞與太郎を手放す心は心底なからうが、そこは己へ義理があるから、據無くそれでは正介頼むよときつと申す、さう致すと己が、善は急げだ直につれて參る方が眞與太郎の爲だと申すから、あれが着替の衣類から襦袢まで付けて手前に渡す、宜しうございます、鳩ヶ谷と申すのは三里半ばかりしかござえませんから、是から行きますと、直に宅を出て觀音様の奥山へでも參つて、日の暮れかかるを待合はして、それから四谷角管村の十二社へ行くのぢや。正「はアそれから。浪「この大瀧は中々物凄い程な高い所から落ちるが、谷の下は深い瀧壺でこゝへ眞與太郎を投り込んで殺して仕舞ふのぢや。

正「瀧壺へ坊ちやまを投り込めつて、そりやア駄目だ。浪「何故いけぬ。正「それだつて、いくら深
 けえ瀧壺だつて、水だから坊ちやまを打込めば死骸が浮くだア、さうなつた日にやア大事だ、直に己
 が業だといふ事が知れて、己お仕置になるだア、お、怖え、こりやア浪江様止めなせえ。浪「いやい
 やそんな心配はいたさいでよい、何丈といふ上から落ちる幅の四間もある瀧だ、殊に瀧壺の下は皆巖
 だから、あすこへ打込めば死骸が底まで行かぬ内に、微塵に碎けて散亂して、どん／＼水に流れて仕
 舞ふのは請合だ、それを首尾よく手前が遣つてくれ、ば金を二十兩遣はす、まだ其の外に手前が得分
 になるのが眞與太郎の衣類また月々幾等宛か渡さねば成らぬ里扶持、是も先へ遣る所がない故、手前
 が途中で懐へ入れて知らん顔で居れば、それは己が承知だからよい、旨く彼を殺して、澄まして宅
 へ歸つて口を拭いて居ればよいのだよ、旨く遣つてくれ。正「へえ。浪「へえではいけん、生返事を
 致すのは不承知か、不承知なら宜しい、大事を明させて、それで厭だと申せば是非に及ばぬ、手前を
 切殺して、己も後で割腹致して相果てる、覺悟いたせ。と又刀を引寄せますから、正「まあお待ちな
 せえ、えゝ氣の短けえお人だ、まだ否だと私い言ひ切りやアしねえだア。浪「それでは承知して呉れ
 るつもりか。正「仕方がねえなア……遣りますよ、遣つてけべえ。浪「承知してくれ、ば重疊だ、さ
 アそれでよいから一杯やつて飯を喰へ。などと申しますが、正介は情ない事だと思ひますから何うし

て酒どころではない、此處の勘定も程よく濟ませまして、浪江は正介と連れ立ちまして宅へ歸りまし
 た。浪「今歸つたよ、おきせは眞與太郎が乳が足りないで泣いていけませんから寝かし付けて居り
 ます。浪「え、また泣くのか、いかねえの、さうビイ／＼泣かしては逆上るよ……あれ靜かにさせな
 いか、極りだよ、なに乳がないから、それだから里に遣るがよい、なア正介、手前が頼まれた口か
 はあれは至極よいな。きせ「まあお歸り遊ばしませ、やう／＼寝ました、もう本當におやかましい
 らつしやいませう、これと申すも私が乳が上りましたので、最う少いものですからむづかりまし
 て。浪「何うも子供は乳が無いといかんもので、是迄ちつとも泣かなかつた者が俄にビイ／＼、それ
 だから里に遣るのが一番だよ、のう正介。正「へえ。浪「へえではない、手前が夙うから頼まれて居
 る所などは好いではないか。正「えゝ宜うござえます。浪「田舎は何處だ。正「へえ此處だよ。
 正「何を申す、これ慥か鳩ヶ谷とか申したな、おきせ能く聞いて見るがよい、正介が頼まれた所といふ
 のは、鳩ヶ谷といふ田舎で此處から三里、なに三里半もある、うゝむ大盡ださうだ。正「はア馬の二
 百石もある、田地の二十疋もある。浪「何ちや田地が二百石、馬が廿疋、それは中々富限だ、其の
 嫁といふのは手前が妹の姪で、え、それは丁度よいな。正「坊ちやまを田舎へ遣つて御覽じろ、そり
 やアくり／＼と肥つて乳が漏る程澤山あるからえゝよ。浪「名は、えゝ喜左衛門とか云つたな、おき

せ、正介が口入だから案じる事はない、眞與太郎が手前の乳を探つて出ぬから、怪訝な顔をして泣出すのは、實に見てをつもりもいらしいよ、彼が爲だから早いがいよ、今日正介に頼んで連れて行つて貰ふがいよ。と少しは話のごさいました事ですが、斯う急な事とも思ひませんから、呆氣にとられましたが、根が素直のおきせゆゑ、きせ「それでは正介お前が先を請合ふのかえ。正「へえ私い請合ふよ、先は田地の二百石もあつて馬が二十疋もある大層な富限だよ。きせ「お前の親類だとお云ひだから坊を遣つても安心だ。と浪江が傍で急ぎ立てますから、これも義理づくつと折角泣止んで寝て居ります眞與太郎を起しまして、着物などを着せ替へまして、箆笥から出しました着物、これは平常着、これは餘所行と重ねて風呂敷へ包み襦袢までを一つに致したが、傍で見をります正介は、心の内で情ない事だと涙を呑み込んで居ります。おきせは眞與太郎を抱き上げて、まづ暫く逢へぬから、これが當分乳の吞ませ納めだと、出ないわが乳をふくませます。おきせはこれが全く我子の顔の見納めと後に思ひ當りませうが、神ならぬ身だから存じませんが、きせ「正介や、お前に頼んで置くがね、此の子は虫を起して時々引付ける事があるから、其の時には救命丸を一粒か二粒吞ますと直に開きがつくからと、先のお母様へさう申してお呉れ。正「え、ようござえます、案じねえがえよ。きせ「なに決して案じはしない、たゞ餘り早急だから、何だか手の内の物を奪られる様で。正「尤もだよ、手

の内の物を奪られるのだからね。きせ「あの途中で泣いたら頼むよ。正「ようござえます、此頃は私に馴染んでござるから、若し泣いたら爺が落雁を嚙んで上げやす、それで直に泣き止むだア。

二十三

正介「さア坊ちやま爺が懐へ、え、なに穢ねえつて、何まだ寒くねえから抱いて行くだよ、御新造案じねえがえよ。とは申しますが、これが母子の別れかと思ひますと、胸がいつばいになります。浪「これ正介、早く行つてくれ、何ぼ日が長くつても三里餘もある所だ、え、何だか手放すのが可愛さう、馬鹿な事を、死別れでもしやアしまいし、また泣くのか不吉だよ。正「そんなにがみく仰しやつたつて、これが泣かずに。浪「え、手前までがそんな事を申すからいかん、困つたな女といふものは愚痴が先へ立つから。きせ「いえ此の子が乳の多い所へ参りますのでございますから、決して泣きますの何のと申す事はございせんが、平常虫持でございますから。浪「いえ、それは案じないが宜いよ、先方は田舎でこそあれ富限だ、醫者様などは二三人は屋敷内へ抱へてある、手前方などは中々適ひません、鹽梅が悪ければ直に手當が届くさうだ、なア正介。正「へえ其の通りでござえませう。浪「案じる事はないの。正「へえ。と幾ら歎いても冗な事と思ひますから、目の中へいつばい涙を溜ま

して、衣類の包んである包を背負ひまして、正「それでは行つて参ります。浪「それでは頼むよ、道を氣をつけて。きせ「お前御飯を喰べてお出でならよい。正「いや飯などは咽へ通らねえ。きせ「なに咽へ通らない。正「なにまだ喰ひたくねえから出懸けます。きせ「何卒ね坊を。浪「そんなにしつこく云はんでもよい、正介承知してをる。と別れを惜しみますのを、浪「頼むよ正介。と隔ての襖を立てきり、「此方へ來なよ、情が強いので、何うも死別れでもする様で、人が笑ふから大概にしな。と鬼の様な浪江、おきせはワツと泣き伏しました。正介は眞與太郎を抱きまして、柳島の土手を日蔭をよりましてぶら／＼、あれから吾妻橋を渡りまして、雷門の前から田原町門跡前、下谷通りへ出まして、上野山下を突つきり、湯島切通しを上つて本郷へ出て、菊坂を下りまして、小石川と段々参りますが、秋の末でも中々日がまだ永いから、道で休み／＼市谷通りから四谷へかかりました頃は最う日が暮れました。其の頃は新宿がまだ繁昌な時分で、兩側は萬燈のやうに明るく、ちりからかつほで藝者を揚げて騒いでをりますが、こんな事は耳に這入らぬ正介は眞與太郎を抱きまして彼方此方と道草を喰ひまして、角管村の十二社へ來ました頃は漸々四つでございます。御案内の通り新宿の追分から左へ切れて右へ／＼と参りますので、こゝらは新宿の賑やかに引きかへまして、角管はもう家も疎で畑が多うございます。十二社の入口は大樹の杉が何本となくありまして、遠くから瀧の音が聞え

ます。此の角管村の十二社権現の瀧と申しますのは江戸名所圖會にも出てをりますから、委しく申し上げませんでも宜しうござりますが、是は紀州藤代の鈴木九郎と申した人がござりましたが、このお人が浪人をいたして關東へ下り、只今の中野に住居いたしましたのが、彼の熊野権現はわが産神でござりますから信仰いたしましたして、宅の邊へ祠をしつらへまして勸請したので、是は應永の頃の事で、熊野十二社権現を祀りました故、後に十二社を十二社／＼と訛つて申しましたのが、只今では本當の名の様になりましたして、誰でも十二社の瀧へ行かうなどとおつしやいます。十二社の瀧へ行かうとおつしやると、やあをかしい、十二社のことを此奴ア十二社だつて云やアがる、なんかとよく争ひがござりますが、こんな訛方言が後々へ傳へまして、本名の様になりました例はまゝでございます。瀧壺は只今では崩れまして二段に落ちて居りますが、其の以前は三丈も高い所から落ちましたさうで、先年東京府からお役人が御出張になりましたして測量なさいましたさうですが、只今では瀧の幅も狭く高さも至つて低くなりましたとやらで、上水の流れでございますから、人が懸かるの浴びるといふ譯には相なりませんとやらに聞きました。尤も此の外に瀧が二筋もありまして、こゝへは誰でも懸かられますから、夏の頃は随分群集いたしますさうで、頃しも寶暦の三年九月二十日の事で、二十日の月は木の間へ芽え渡りまして、瀧の音は木靈に響き、梟の啼きます聲はギヤ／＼と何となく物

妻い。正介は眞與太郎を抱きまして、大瀧のこなたへ参りましたが、下を見ますと、成程浪江の申し通り、ドウ〜と落ちます瀧の音、岩に碎けてパツと散りますのは白く見えて、木の間を洩れし月に映じましてきら〜と、宛ら硝子を石か何かへ打付けますやうで、正介は暫し眞與太郎を抱きまして、只茫然と瀧壺を眺めてをりました。

二十四

正介は今大瀧の下へ参りまして、谷から下を覗きましたが、ゴウ〜と水音がして如何にも物凄く、ア、此の瀧壺へ此の坊様を打込むのかと思ひますと、身の毛もよだちまして恐ろしく、正介「坊ちやま、おめえ様はまだ二つだから、何をいつたつて頑是ねえから分りますめえが、まア聞きなさい、この正介爺はおめえ様のお父様には九年も奉公ぶつて大恩受けただが、あの悪人の浪江さんがお弟子になつて、おめえ様のお母様と懇して、忘れもしねえ去年の夏、あの浪江に欺されて、勿體ねえが旦那さまを己が手傳つて殺した、其の時己も加擔しまえと思つたが、あんな奴だから、厭だといつたら己ばかりなら構はねえが、旦那や御新造をどんな目にか逢はせやアしねえかと、それが怖えからつひ頼まれて遣つつけただがそれが、己の一生の過りで、まだ何にも知らねえお前様まで此の瀧壺へ投

り込んでおつ殺せつて、己情なくつてなんねえから、是ばかりやア止せよ、己堪忍して貰ふといつたら、一大事の事を口外して厭だと申すのは、大方眞與太郎が成人を待つて助太刀伊して手前おれを親の敵だといつて討たせるのだらう、え〜もう頼まねえ、われえ殺して己割腹して相果てるだつて刀を捨くるだア、お、泣いちやアいかねえよ、乳ねえもんだから尤もだアが、かゝ様だつて乳が出ねえから、それ落雁を、え、そら……噛み碎いて上げる、ヲツト〜、ついでに襦袢を取替へて上げべえ……や、おめえ様、もうぐつ〜り抜いたね、濕つほいよ、そら〜、これでさつぱりしたかえ、お〜い〜よ〜、坊ちやま、己は誠に濟まねえと思ふだが、あの邪険な浪江が殺せといふから諦めて死んで下せえよ、實に御新造へ濟まねえ、堪忍してくだせえ。と眞與太郎を抱上げまして谷を覗きますと、瀧の音はすさまじく、岩に水が當つて飛散るさまは恐ろしい……正「あゝ素晴らしい水音だ、下は地獄だよ、坊さま堪忍して下せえ、お前さまを殺すのは皆あの浪江だよ……あゝどうも頑是ねえお子だと思ふと打込めねえ、あれ今殺さうつて打込まうといふのに、何にも知らねえもんだから、にこ〜笑つてござらア、可愛い〜ものだな、あゝこれを見てはもう〜よしだ、やめだ、坊ちやま、落雁で欺されて泣止んだか、お、笑ふかえ……と我を忘れてあやして居りましたが、正「いや〜どうも可愛くつて殺すなんてえ事は出来ねえが、若し殺さずに歸つたら、浪江めが眼をむき出して怒るべえ、

其の上にまた生かしては置かねえなんて双物三昧仕兼ねえ、あゝ可愛さうだが矢張此處から打込まうか、坊ちやま、濟まねえ、お前様のお父様を殺したのはあの浪江、此の正介爺はほんの少しばかり手傳つたのだよ、またお前さまアを殺すのも浪江が仕業堪忍してくだせえ。と殺さずに内へ歸つたらどんな目に逢ふか知れないと臆病で馬鹿正直な正介、眼を睨りまして、堪忍して下せえ坊様、と岩の角へ片足踏みかけ、南無阿彌陀佛と念佛をとなへながら、無慙や眞與太郎を瀧壺へ打ちこみました。岩の間から雜草が生ひ茂つてをりますから、其の中を眞與太郎はガサ／＼と音がいたし、オギヤア／＼と泣く聲がいたすが、打込みました時水音がしませんで、どうやら中途へでもと覗きます正介、正坊ちやま、「オギヤア／＼。おゝお泣きなさるね、アゝ葛葛へでも引懸かつて、それでお泣きかえ、坊ちやま、あゝ情ねえ、一思ひと思つたに、あゝ途中へ引懸かつたか、坊さま。「オギヤア／＼」正「困つたなア。と月明りに透して谷を覗き、坊さま／＼と彼方へ行つたり、此方へ行つたり、正介は彷彿致し、あゝ何うしたのだえ、と今谷を覗きますと、今まで泣いてをつた眞與太郎の聲はばたりと止みましたが、樹の間を洩れた月のいつか曇りまして、一天は青空であつたやつが俄に眞暗になりました、四方から霧が立昇つたと見えて邊は朦朧といたし、正介は「坊ちやま、何うなせえました、南無阿彌陀佛／＼、眞與太郎さま。と瀧壺を覗きますと、あら怪しや、どう／＼とみな

ざり落ちます瀧の中に、眞與太郎を抱き上げてまして我が主人の菱川重信が朦朧と形を顯はし、段々上へあがつて參る様子、正介は、坊ちやまと覗き込みました其の眼先へ、ヌツクと重信が眞與太郎を抱きまして姿を顯はしましたからあつと云つて正介は後じさりを致し、正「や先生さまか、ア、旦那さまか、堪忍なせえ。と身を震はして驚きましたが、これより眞與太郎の命が助かりますか何うなりますか、一寸一息吐きまして申し上げませう。

二十五

驚きました正介は怖々ながら重信の顔を見ますと、去年六月六日の夜、落合橋で殺された時のまゝで、淺黄縮の五つ所紋帷平に献上博多の帯で、かう……肩先から乳の下へかけて、生々とした血が付いて、總髪をふり亂し、眞與太郎を抱きまして忽然と霧と共に形を顯はし、正介の方を睨みまして、憤怒の相は身の毛もよだつばかりで、正介はア、と云つて頭を兩袖で隠し、俯伏してしまひました。重信は大聲で、重「正介／＼、汝は性來正路潔白なるが故に悪人磯貝浪江に強迫せられ、去年六月落合にてよくも大恩ある此の重信の頭上を打つて、重悪人の助けをしたな、又妻おきせ事も犬畜生に劣つたやつ、今に彼奴等はわが怨恨其身に付き纏ひ、苦痛をさせた上身は八つ裂にしてくれんが、汝と

ても其の通り、假初にも主を殺せし大悪人、骨を砕いても飽足らんやつ、此の所で殺すのは安けれど、今汝を殺しては、此の眞與太郎を養育して我敵を討つて鬱憤を晴すものなければ、命を取る事は免し遣はず、其の代り汝今より悪心を翻へし、此の悴を何處の地へなりと連れて参り、成人さした上で敵浪江を討たして、わが修羅の妄執を晴させてくれよ、だが汝浪江に謀かられたとは云ひながら、大恩ある主人を殺害いたす助力をなして頭上を打つたな、思へば憎き奴。と眼血走り、髪を逆だて、突然正介の髻を掴んで、斯う……草原へ引きずり、頭を擦りますから、正介はたと御免なさい。重「よいか今申した事を忘るゝな、我即座に汝が一命を取るぞよ。正「あゝ免して下せえ。と正介は總身へ油汗を流し、言分をして謝らうと思ひましても、口が利けません、唯口の内南無阿彌陀佛くくくと唱へてをります。重「よいか、改心致したか、改心致して眞與太郎の力となり、敵を討たせ無念を晴らせよ、よいか。正「はあゝ……ようございます、南無阿彌陀佛くく。と一生懸命に念佛を唱へる其の内、不思議や、必ずく忘るゝな、と重信が大きな聲でいつた一聲が耳に残つたばかりで、さつと吹來る風もろ共に重信の姿はいづれかへ消えました。正介は汗でびつしよりになり、正「旦那様、御免なせえ、南無阿彌陀……と怖々頭を上げて見ますと、いつか瀧壺へ打込んだと思つた眞與太郎はわが膝の上に居りますから、又悔りいたし、正「や、ぶつ込んだ坊ちやまは此

處にお居でだ、あゝそれでは旦那の幽霊……あゝ……慄然といたして、あゝ情ねえ、まア旦那さまが我子の眞與太郎さんに引かされてか、あゝ御免なせえ。と夢か現かわかりませんから、茫然と邊を眺めて居りましたが、耳に残りましたのは、必ずく忘れるなといふ重信が聲と、どうくといふ瀧の音のみ。頃しも九月二十日の月は一且雲に隠れましたが、又出まして樹の間を洩れてぼんやりと邊は明るい……正介はすやく眞與太郎が寝てをる様子ですから、塵を拂つて立上り、正「あゝ悪い事は出来ねえもんだ、去年浪江さんに欺されて、金を五兩貰つたが一生の己の過りで、否だといへば已え斬つて切腹するといふから、餘儀なく濟まねえと知り乍ら、大恩受けた方の頭をくらはし勿體ねえ旦那を殺した手傳ひをして、それからまた坊ちやまを此の瀧壺へ打込めて、あゝさう思つても身の毛がよだつた、あゝ旦那様よく意見してくらした、己けふのけふといふ氣が付いたよ、決してお前様がいつた事は忘れねえよ、これから坊様を育て、助太刀をして悪黨の浪江を殺してお前様の鬱憤はらさせます、坊様をすんでの事に此の瀧壺へ、あゝ此の谷から覗いてもぞつとする、あゝ……寒くなつた、まだ己いゝ事にやア、浪江から貰つた二十兩こゝにあるから、これから練馬在の赤塚が己の故郷ゆゑ、其處へ坊ちやまをお連れ申して行つて、兎も角もして己が成人させて、敵討たせ、旦那の幽霊さまへ詫ひするが專一だ。と根が正直一圖の正介でございますから、眞與太郎を懐へ入れまして十二

社を立出で、後へ戻りまして追分から新宿へ出ました頃は、まだ丁度九つ過で、盛り場の事ですから往來は賑やかだ、この内が立派だからこゝへ泊らう。と扇屋と申します宿屋へ這入ります。「いらつしやい、お一人様で。正「いえ獨りぢやアねえ、坊ちやまと二人連だ。「おやお子様をお連れなすつて、奥の六疊へお連れ申しな。と遅うござりますから六疊へ連れて参りましたが、正介は眞與太郎が晝つから乳を舐みませんから、嘔餓じからうと我膳に着きません内に、正「此の子に乳を一杯貰ひてえが。と頼みましたが、亭主が出て参つて、生憎宿には乳呑兒がないので餘所から貰ひますのですから、何分今夜は遅いゆゑ明日にして下さいといふので、正介は餘儀なく又落雁を噛み碎いて喰べさせまして、床に就きましたのは九つ半か八つ頃でござりました。

二十六

正「これさ泣いたつてだめだよ、ソレ落雁の粉だ、黙らつせえ、えゝ子だ、えゝ坊ちやまだあよ、ソラ行燈に灯々がついて居るよ、泣かずに寝ねえせえ、昨夜までおつかさまの乳いしやぶつて寝たものが、俄にこの正介爺と寝るのだから尤もだよ、これもお前様は頑是ねえけれども因果だと諦めて居なせえ、温順になさると翌朝澤山乳い香ませます。と欺しつ賺しつ致しますが、いたはしや眞與

太郎は唯ヒイ／＼と泣くばかりで、少しも眠りません。正介を泊めました扇屋では夜つびて赤兒が泣きますから、耳について寝られませんか。女房は堪らなくなつたから起きまして、正介の寝て居ります座敷へ遣つて來ました。女「御免下さいまし。正「何だえ、用でもあるかね。女「いえ別段用事ではござりませんが、大層お子さまがおむづかりなさいますが、何うかなすつたのでござりますか、お虫のせいで。正「いや虫でもねえのさ、宵に泊つた時に、乳の出る女アねえかと聞いたはこゝのことだ、坊様がお前乳ねえもんだから、それでむづかるのだ、己いくら欺しても泣きが留まらねえで實に困つて仕舞つたが。女「それはまあお困りでいらつしやいませう、生憎私が乳が出ませんでいけません。正「實に困つたよ、泣子と地頭にや勝たれねえといつて、當惑したが、お内儀さん何うかして、たつた一杯乳い香ませる工風が付くまいか。女「もう私も何うかと存じて、いろ／＼考へてをりますのでござりますが、何を申すのも夜中でござりますから困ります、さア少し私が、どれ／＼お坊ちやん、よいお子で。などと女房も騒々しいと思ひますから、抱いて遣ります。所へ廊下を通りましたのは四十前後の商人風のお内儀さんで、この家へ泊り合せました客で、そこは子持といふものは人情の深いものでござりまして今眞與太郎がヒイ／＼泣いてをりますのを見て、正介の座敷へ這入つて参りました。客「おやまあどうなさいましたの、私は只今下へ手水に参つたら、大層お小さいのが

お泣きなさるから、此方のお子さんかと下でお尋ね申したら、まアお客さまのだつて、おや／＼お可愛さうに、さア一寸およこしなさい、丁度張つてをりますから一杯飲まして上げませう。と宿屋の女房の抱いてをりました眞與太郎を受取りまして、自分の乳を飲ませてくれますから、正介大悦びで、正「まア御親切さまに、有難えつてこんな嬉しい事はねえ、もう泣き出しては止まらねえから手こすつた所だ、これは有難え。客「いえさぞ貴方お困りでせうえ、このお子はあなたではない、え御主人の、左様でございますか。

二十七

客「誠に子供を持ちますと御同然に。と世辭を云ひながら乳を飲ませますと、子供は罪のないもので、暫く乳をしやぶつて居りましたが、腹がくちくなつたからすや／＼と眠ります。正「はア誠に坊さまが、あれ……腹アくちくなつたと見えて現金だよ、そら眠つた。女「ほんたうに、まア呆れたものです、あれ御覽なさい、すや／＼と鼻をかいてさ。客「子供衆はお乳が何よりか一番でございます、寝んねなさいましたら御免なさい。と泊り合せました女房は我が座敷へ歸つてゆきましたが、正介は人に入鬼はないと悦んで、眞與太郎を抱きまして其夜は眠りに就きました。其の翌朝の事で、

正介は自分も手水に行き、又眞與太郎にも小便をさせやうと下へ降りてまわりますと、便所の傍の流に、お定まりの鹽筥が片つほにありまして、もう九月でございますから、銅壺のある風呂へ湯が湧いてあるといふ、小さな金盥が三つばかりありまして、顔を洗つて居りました五十近い男が、正介が今眞與太郎に小便をやりながら、しい……そら出た、大層しよぐりなすつたなどと云つて居ります顔を見まして、男「もし、其所においでのは眞與島さんの正介さんぢやアないかえ。と名を呼ばれましたから、疵持つ足の正介恟くりいたしました。正「誰だえ名を呼ぶるのは。男「わしだよ。正「誰だえ。男「正介さん、まア變な所で逢つたね、高田の南藏院でお心易くした原町の新兵衛、萬屋新兵衛だよ。正「え、新兵衛さまだえ。新「あい、新兵衛だが、見れば乳香子をつれて、昨夜こゝへ泊んなすつたのかえ。正「あゝ新兵衛様か、おれ誰だと思つて恟くりした。新「まアこゝで互に逢はうとは思はなんだ、さうしてお前何所へ行きなすつて。正「私十二社へ、いえ瀧へ、なに瀧浴びに行つた。新「なに瀧を浴びにお出でだつて。正「なに左様ぢやアねえ、十二、十三、新「相變らず面白い人だ、兎も角も一寸私の座敷へお出で、其のお子は……あゝ昨夜内のが夜中に乳を吞まして上げたと言つたお子はお前のお連れのお子だらう、どうも不思議な。正「はアそれでは夜中に乳い吞ましてくらしやつたお内儀さんは貴方の所だつて、それは不思議、大方旦那様の幽霊……。新「なんだとえ。

正「なに南無阿彌陀佛」。と念佛を唱へ、兩人はわが座敷へ参りました。

二十八

圖らずも正介は小石川原町の萬屋親兵衛に逢ひましたから、正「去年中は種々主人重信が御厄介になり有難うござりました。と禮を述べますと、新兵衛も「誠にあの節は毎日失禮ばかり云ひましたが、叔先生も飛んだ御災難であゝいふ譯になり、其後承はればお弟子の浪江さまとやら、あの先生が落合であゝいふ事のあつた晝お出でなすつた方で、色の淺黒い苦味ばしつた、あのお方が後へおなほりなすつたつて、御新造がお美しいから浪江さまはお仕合せだ……さうしてお前どこへお出でよ。正「へえ私い今云つた通り、十二社へ瀧を浴びに。新「瀧を浴びには少し變だが、私も瀧に縁のある高尾山へ参詣に、これか、なに私の内のやつで、昨夜お前のお連れの子へ乳を上げた、お秀といひます、どうぞお心安く、へい、なに私も昨夜無理をすれば歸られますが、矢つ張り子供があるので此所へ遅く泊つたので。正「はアお内儀さんでございませうか、いやお前さまのお蔭で坊ちやまが泣き止んだと。新「なにかえ、それでは其のお子は。正「へいこのお子は御主人のお子で。新「重信先生の成程どこか争はれないもので似ておゐでなされるよ……このお子さんとたつた二人はをかしいね、御新造や何

かはお先かえ。正「いゝやたつた二人で。とあらはには云へぬ事でございませうからもうぢ〜致し、正「新兵衛様、かうして坊さまをお連れ申してお家を出たのは、種々込入つた譯のある事で、いづれ後で分りますが、今は云はれねえ大事な一件で、お前様こゝで私に逢つた事は人に云はねえやうにして下さい。と眞實面に現はれまして頼む様子に、新兵衛も承知しまして、新「それでは何か譯のある事ゆえ、お前に逢つた事は他人に云つて呉れるな、好いよお案じでない、決して他言をせぬから。正「貴方が他言して下さると一件が出るよ。新「何一件とは。正「怖え顔をして。新「なんだか變だね。……と新兵衛は變な正介が素振りでございませうから、これには何か譯のある事と思ひまして、決して人に出逢つた事は云はぬから安心なさい、お秀お別れにもう一杯このお子へ上げて、それでお別れをせやう。秀「さア此方へお出でなさい。と眞與太郎にお秀は乳を吞まして呉れます。其内に新兵衛も正介も勘定を済ませまして、それでは呉々も私に逢つた事は云はねえで。と互に此處で別れましたのも其の翌朝の事で、これから正介は眞與太郎を負ひまして、吾生れ故郷だからと、練馬在の赤塚といふ所へ参りましたが、此處には一人の姪がござりまして、亭主は矢張り百姓で文吉と申して極堅い人でございませうから、先づこゝを頼り我身の上を話しまして、兎も角も主人の遺子を養育しなければならん、と此の赤塚に落着きました、相變らず乳に困りますから、姪がだきましては隣村邊を貫

つて歩きます事、正介は若しや浪江が己を探しては居ぬかと思ひますから、一月二月ばかりは外へ
 とては少しも出ませんで内にばかり引籠んで居ります。悪才に長けてをります磯貝浪江でございます
 から、扱は正介めは眞與太郎を連れて駈落をいたしたな、何でも彼奴は眞與太郎に成人させて、己を
 敵だと云つて討たせる積りであらうと、すぐにも氣が付きさうなものでござりますが、それは世に亡
 き重信が導きます所か天命とでも申しませうか、浪江は正介が全く二十兩金を遣はした所から、後難
 を恐れ此の上ままたも難題を云はれては困ると、あいつ瀧壺へ眞與太郎を打ち込んだまゝ何處へか逃げ
 て仕舞つたのだらう、師匠を殺す時にも手傳はした正介、あんな馬鹿正直なやつだからよいけれど、
 あれでも己が悪事を知つて居るかと思ふと、どうも寢覺が悪かつたが、先から身を引いたのは願つて
 もない事だ、あいつが訴人でもすれば罪は遁れぬ同罪だから訴へる氣遣ひはない、何しろ正介が、急
 に内に居なくなつたのは勿怪の幸ひだと、浪江は却て悦びまして、おきせには正介が善くない奴だと、
 種々な作り事をいひまして、何も彼も罪を負はせ、是で枕が高く寝られると、居なくなりましたのを
 苦にいたさないのが、後で考へますと全く浪江が大悪無道を天の免さぬ所でござりませうか、これか
 ら貧苦の内に眞與太郎を育てまして、終に親の敵を討たせますといふ、赤塚村乳房榎の由來のお話に
 成りますが、一寸一息つきまして。

二十九

扱、眞與島の下男の正介は再び浪江に欺かされて、既に重信の遺子眞與太郎を、角筈の十二
 社の瀧壺へ打込まうといたした所へ、朦朧と重信の靈が現はれまして、親の敵を討たしてくれとの頼
 み、自分の身に悪事がございますから、其の罪滅しに一命にかけてもあの浪江を坊様に討たせますと
 請合、一人の姪が赤塚に居りますので、是を頼つて眞與太郎を連れて参りました事で、田舎の人とい
 ふものは大都會に住みますお人より幾らか質朴で、まア悪く申せば世事に暗い方でございますだけに
 正直で、何事によらず親切にいたしますから、姪の亭主の文吉が叔父さん／＼と云つて正介を大事に
 いたします。正介も厄介になつて居りますのだから、骨惜みをしませんで、朝早くから田畑へ出て精
 を出し、また人に雇はれなどして、その僅かの賃金を食雑用に入れます。文吉は「叔父様よしなさ
 いよ、己水呑百姓だつてお前さま一人ぐらえ麥飯食はするに不足はねえから、それぢやア他人行儀だ。
 と入れました錢を返し」お前様の小遣えにさつしやい。と呉れます。憂きが中にも、正介は姪と文吉
 がよく世話をしてくれまので安心をいたし、眞與太郎の成人を待つてをりますが、其年も暮れまし
 て寶曆四年となり、今年はもう眞與太郎は三歳になりますから、追々間食をしますので乳々と申しま

せん。いつでも大きな笹の中なんぞへ入れて内へ置きにして、家中畑へ出てしまひます。そこは田舎は暢氣なものでございますよ。正介はまた浪江から貰ひました二十兩へは悉皆手を着けずにもつてをりますので、まアかうやつて姪の夫婦が親切に世話はしてくれるが、まだ己も足腰の達者の内だからさうく厄介になつても氣の毒、二つには眞與太郎様が成人して敵でも討つといふ時、人の家に居れば必ず迷惑をかけねばならないから、此の金のある内に別に別になるのが双方の上分別だと、これから別家を心懸けてをりますと、つひ此の村に松月院といふ寺がありました、此の門番に去年の霜月まで爺と婆が居りましたが、仔細あつて夫婦とも廻國に出てしまつたといふので、空家でありますから是を正介は求めました。家と申しますと大層でございますが、損じてをります。瓦家根の朱塗といけば強氣だが、紅鼓か丹で塗りました剝げた門がござりまして、此の潜りの所に矢張り瓦家根ではござりませんが、一間四方ばかりな門番がござります。是も矢張り家根が損じて、土が出て居りまして、瓦が落ちかゝつて居ります。臆病なものには怖くつて下は通れないといふ危険な門で、此門番から、茅草で太い竹柱にいたし、間口二間に奥行が九尺といふ建足がござりまして、根太の張つてござります所はほんの三疊ばかりでこゝに圍爐裏が切つてある、後は皆土間で、北の方はひしぎ竹の下見へ裏から邪見に泥が塗つてある壁……まアく壁で、是から西の方へかけて乾葉が繩につけて乾してある。こいつ

が風が吹く度にがさくいふといふ田舎家のお約束でございます。是を正介は五兩と幾らかで求めまして、眞與太郎と二人引移りましたが、こゝに正介の運のよい事には、正介が門番に成りますとちきに、此寺にございます榎が、乳の出ないものが信心すると利益があるといふので流行り出し、此の榎の洞の様な所に頼と乳の下つた様な瘤が幾個もあります、此の先から乳の様な甘い露が垂れるが、是を竹の筒に入れて持つて歸りまして乳のさきへ附けますと、屹度出ない乳が出るといふ。是は露ではありませぬ木の脂でございませうが、この流行り初めましたといふのも一つの不思議で、是は去年新宿で出逢ひました彼の小石川原町の萬屋新兵衛の女房が、あれから後に乳へちよつとした腫物が出來ましたが、大層痛みまして醫者にかゝつても抄々しく癒りません。何でも信心をするより仕方がないと、白山様を頻りと信仰いたしますと、或る夜の夢に白山権現が現はれまして、汝赤塚の榎の下にある我を信仰いたせば忽ち利益を興へる、其の榎から垂れる所の乳を痛み所へ附けよ、立所に平癒すべしとお告げがありましたから、新兵衛夫婦は信心肝に銘じまして、早速其翌日赤塚の白山権現といつて尋ねましたが一向知れませぬ。知れませぬ筈で、白山権現が別にあるのではないから尋ねあぐみまして、新兵衛夫婦が松月院の門番へ立寄り、圖らず正介に出逢ひますといふお話、誠に一二回の所はほんの敵討の端緒を並べますのみゆる、定めし面白くございませぬが、今三四回で讀切ります

故御辛抱の程を願ひ上げまする。

三十

新兵衛は夢のお告げに悦びまして、赤塚へ参り尋ねあぐみましたから、松月院の門前へ草臥れて立寄り休みますと、其處に居りましたのは正介でございますから、互ひに又巡り逢ひましたのを不思議に思ひ、まア何で此邊をお歩きなさると聞きますと、「實は女房がこれ／＼の次第で、其の願懸に榎を尋ねた所、何處にあるのか一向分らず、もう根が盡きてならんから、思切つて歸らうかと思ひます」と話を聞いた正介は、正「それは不思議なこんだが、其の榎の下に白山様があるつていふのは、大方此門の内の榎だんべい、私も近頃こゝへ来て間もねえから、能くは知らねえが、榎の下にあるお札箱のやうな小せツペえ宮が、白山大権現様だと聞いたと、まア彼處へ行つて見なさい。といひますから新兵衛も悦び、これから正介が案内をいたしましたして、榎の下へ行つて見ますと、如何にも古びたお宮がありました、額もなければ何も神號を書いた物は有りませんが、白山さまにはお約束の房楊枝が五六本煤だらけに眞黒になつてあがつて居ります。これは村の者が口中の煩ひでもして、此の神へ願込をして癒つたから納めたものでござりませう。これに榎を見ますと成程乳房の様な瘡が幾個もあつて、

其の先から垂れる程脂が出て居りますから、いよ／＼是だと新兵衛はまづ漱い手水を遣ひまして信心をいたし、此の榎の乳から垂れます水を竹筒に受けまして、正介に暇を告げ歸りました事で、正介はこれまで此の白山様にこんな利益が有らうとは知りませんでした、新兵衛が靈夢に感じて遠々からわざ／＼探して來るのは奇妙だ、幸ひ眞與太郎さんも乳がなくなつて、時々思ひ出すと泣いていけないから榎の露を飲ませべい、とこれから眞與太郎にも竹筒にうけては飲ませ、頻りと信心を致し、毎朝毎朝焚きますれば麥飯だけれども御膳を上げる、または落雁や駄菓子などを上げて居りましたが、其後三七廿一日目に新兵衛は夫婦連で禮参りに遣つて來まして、願ほどきに小さな幟と、かう女が坐つて乳を絞つてをりますと、此方のはうに雲があつて御幣が立つてをるといふ額を納めまして、正介へもお前が此所にお居でばつかりで尋ねあぐんだ白山様も知れたのだから、と何か禮に二朱包んで呉れまして、御利益で乳瘤にでもなりさうな腫物が癒つたから、お禮には百人の者へ弘めるといふ最初のお告げだから、これから人に此方の榎の事はなして信心をさせます、と松月院へもお經料を納めました、其日は歸りましたが、其頃は只今の様な開化の時と違ひまして、兎角に變なものを信心をいたしますのが流行りますから堪らない。僅か三月ばかりの内に赤塚の榎の洞の乳から乳が出るが、人間の乳と少しも違はねえで、乳の無え子なんぞにはそれを飲まして置けば無病でづん／＼育つさうだ、

それに親の出ねえ乳まで七日の内に屹度出て来るのは不思議だ、奇妙だ、と噂をいたしますから、いよ／＼評判が高くなりまして、赤塚の乳房榎／＼と誰いふとなく申します。仕合なのは正介で、ちらほらと参詣がございますから、終には乳を貰つて歸ります竹筒ほうを何本も拵へて賣るやうになり、又休んでゆく人もありますから繁昌で、正介は間がな隙がな、此の白山権現を祈りまして、何卒主人の倅眞與太郎を成人させまして、父の敵磯貝浪江を首尾よく討たせて下さい、と一心に願ひます。少話が前後いたした様でございますが、此の赤塚といふ村の事が江戸名所圖會に出て居りまりから一寸申上げますが、赤塚と申します地名は昔高位のお人の墓があつた所ゆゑ、あらはかと申しましたとも、又赤塚右近、同藏人などいふ大名が住んで居りました所故赤塚と申すとか、榎の洞から乳の出ました事も昔の事で、此の乳をもつて孤兒を育てたといふ事が出てをりますさうでございますが、榎のございます寺は萬吉山松月院と申して、禪宗で只今以て歴然と残り居りますが、こんな事は申し上げずとよろしいが、名所圖會に有りますから一寸申し上げ置きますので、扱、其年も暮れまして翌年になり、其年は何事なく暮れまして、光陰は矢の如くとか申しまして、今年には眞與太郎も五歳になります。至つて壯健で育ちますが、其代り宛で田舎の子供になつて仕舞ひましたから、色が眞黒になつて眼ばかり光つて、言葉まで在郷言葉で正介を誠の親と心得てをりますから、爺や／＼と慕ひます

のを聞いては、正介が情ねえと涙を浮べまして水鼻と一所にかんでをります。頃も丁度夏の末で、土用がまだ入つたばかりといふ、恐ろしい暑い日でございましたが、向ふから遣つて來ました男は、四十恰好で、鼠と紺の細かい微塵の越後の洗ひ晒した帷子に、紺博多の帯、素足へ白足袋を履き、麻裏草履で、菅の小深い笠を冠つて、小さな包を背負ひまして、暑いと見えて笠を取りまして腕捲りをし、天地金で親骨がとれかゝつて居ります扇で頻にあふぎながら汗を拭き／＼、「あ、暑い、爺さん水を盥へ汲んでおくれ。」と這入つて参りました。

三十一

正「へい、今冷てえのを上げます、今日は大層暑い日で、それに原ばつかりで日蔭の無え所だから堪らねえ。」と撥釣瓶から盥へ水を汲みまして持つて参り、「さアお遣ひなせえ、随分此水は冷てえ方では自慢でござす。男「そいつは素敵々々、あゝ冷てえ、これは手が切れさうだ、堀井戸かえ。正「へえこからは直三尺も掘れば直出ます。男「あゝいゝ水だ。」と手拭を絞りまして、脊中など拭うてをりました男は思はず正介と顔を見合せました。竹「や、お前は眞與島さんの正介どんだ、先生のお内の……いや正介さんに違えねえ。正「え、なんだえおめえ、なまる程お前さま竹六さまだな。竹「どうも不

思議な所で、どうも夢だね、夢のやうだよ。正「己も夢だよ。竹「實にこんな所でお前に逢はうとは思はなんだ、さうしてどういふ譯で此處に。と聞かれまして、正介は疵持足でございませうから、只もぢもぢして居ります。竹「お前が柳島のお家を眞與多郎さんを抱いてお使ひに出たぎりで歸らないといふ事は聞いたよ、浪江、何さ今の旦那からお聞き申したが、こゝはお前の在所とでもいふのでこゝへ引込んだのかえ。正「いえおめえ様、此譯は話せば長いこんで、一樣や二様の事ぢやアねえだがさうしてまアお前さまがこゝへ來さしたたのは何ういふ譯だえ。竹「いやこれにはいろ／＼譯あり、まア兎も角も咽喉が乾くから茶を一べい、いえ砂糖を入れて、水を、今の冷たいのなら豪氣だ、なに生憎砂糖が黒い、なにいゝとも、どうせこゝらには白いのはない、おつとこぼれる／＼。と腰を掛けまして水を呑みなどいたし、いや少しの内に變るもので、世の中は三日見ぬ間に櫻かなで、最う足掛五年後になるね、先生が落合で殺され、浪江さまが跡へお直りなすつて、まだお前も知つてだつけ、あれから御新造がお産があつたよ、然もお生れなすつたのは男のお子でね、よいお子だけれど、御新造も眞與多郎さんを連れてお前が行方知れずに成つたといふ事をお聞きなすつて、旦那には義理のあるお子の事だから、顯然には氣が揉めねえ、自然と心を痛めたもんだから、お乳が少しも、相變らずさ、出ない、さア旦那が氣を揉んで、あるとあらゆるお醫者は申すに及ばず、乳揉にまで懸つたが出

ない、其中に赤さんは乳がないから瘦せ衰へて、とう／＼お可愛さうさ、亡くなつた、そのお前取片付けをして丁度七日だ、七日目に御新造の乳の上の所へ腫物がほつ／＼りと出來たが、その痛む事恐ろしい、晝夜御新造はころ／＼轉がつて、ひい／＼といつて痛がつておいでなさるので、聞けば此頃赤塚の乳房椽の下白山様へ願を懸ければ乳一切の病なら直に癒ると、とう／＼竹六其のお役に當つて早く行つてお乳とかを頂いて來てくれと、それ例の氣短かで、それといふとそれだから、この炎天を遣つて來たのだが、お前はまた何うして柳島を出なすつたのだね。と不審を打たれました正介、はや先だちますのは涙で、聲を曇らせまして、正「竹六さん、これには段々譯のうあるこんだが、己先の旦那にやア大恩受けたから、何でも其の恩返しする積りで、あの時坊ちやまをつれて走つただよ。竹「え、それでは坊様はあの時一緒で、今でもお達者で。正「まアありがてえこんには、己一心届いて餘所で乳い貰つたり、落雁嚙んで喰べさせたりして、丹精して漸々のこんで成人させただ。竹「え、え、それではなにかえ、坊様はアノお達者で。正「己色々心配して今年は五つだあ、これ眞與多郎さん、どこに居るよ、また裏の池へ懸つてかな、一昨日もお前はまつたぢやアねえか危ねえよ。眞「なに池へかゝりやあんしねえ、竹藪の烏瓜いとるだア。正「烏瓜いとるつて、駄目だ、よせよ、烏瓜いは食はれねえから、こゝへ來て、そら竹六爺やアに大人しくお辭儀するだアよ。眞「おらあお辭儀な

んてえこと知んねえよ。正「知んねえぢやアねえ、困つたよ、竹六さん見て下せい、これが坊ちやまだよ。竹「え、この色の黒い餓鬼が、いえなに、このお子がかえ。と膽を潰す筈で、田舎で育つたら、日に焼けて色は眞黒だし、頭はと申すと赤い毛でもじや〜と散ばら髪でございまして、手織綿の單へ物といふと大層豪氣ですが、方々に色紙が當つて繼だらけで、膝の下は五分ばかりしか丈がないといふ、何う踏倒しの古着屋に見せても、三百にしかは買ふまいと思ふ程、竹六は暫らく眞與太郎の顔を見詰めて居りましたが、竹「お、坊さまかえ、大層立派におなんなすつた、何處かお父さんに面貌が似ておいでの嬉し。眞「己ア爺は此處にゐるのが爺だ、外にお父さんはねえ。

三十二

見違へる様になつたから竹六も驚きましたが、竹「へい、あなたが坊ちやんかえ、まア大きく。眞「え、坊ちやんといふ名ぢやあねえよ。正「これ大人しくなせえ、眞「それでもお坊ちやんぢアねえもの。竹「ねえと仰しやつて、あらそはれないよ、口許が先生に似ておいでだからね。正「もうへい足掛三年ばかりといふものは、こんな草深え所で育つただから、まるで在郷者で、あれまた其處らへさ、小便しちやア駄目だ、よさつせえ、竹「いえあのお前にあまえ、えお可愛さうだよ、先生が御

繁昌ならね、それこそ絹布ぐるめで、もし坊ちやま。眞「また己ぼつちやまだつて、己それな名は知らねえ、馬鹿やい。と竹つ切かなんども持ちまして、田圃の方へすたく〜逃げて行つて仕舞ひました。竹「どうもさつぱりしておいで、好い、だが正介さん、お前こゝにおいでのは何ういふ譯で。正「さア己が身の上を話せば矢張り長えだ、實は是々の譯で。と虚實を交ぜまして、これ迄の家出をいたした事を話しますから、竹六も氣の毒に思ひまして、竹「左様かえ、それでお前が男の手一つで坊さまを養育したといふ譯、中々それは出来ない、お亡くなりなすつた旦那がさぞ草葉の蔭で喜びだらう、お前は感心だ、恐れ入つた、竹六感服……正「お前様、今話した事包まずにいふのだから、もし浪江さまが聞くとお癩持だから、あの爺めふてえ奴だ、と斬り兼ねえから、何うか今日逢つた事は黙つて居て……それも己が命なんぞ一つや二ついらねえけれど、折角成人さしたあのお子を不憫だと思はゞ、のう竹六さん、お前さまも先の旦那には恩になつたゞ、それを忘れずば、どうかこゝで私に逢つた事は、一切他言してくれるな、浪江さんへは云つて呉れるな。と頼みました事で、竹六も眞與太郎が今の姿を見まして、可愛さうだ、お氣の毒だといふ事が、肝に感じました所でございまして、竹「なにそんな事は案じねえが好い、決して云はない、竹六請合つた上は、石を抱いても他言をしないから不思議だよ、それは、あゝべらぼうに暑い日だ、あゝ着物の汗でびつしより、こいつは氣味がわるい、

御免なせえ、序にちよつと帯を締めなほして、なに足は汚れたが足袋を穿いて居るから汚れないのは又不思議だね。と着物を着直しますつもりで、紙入の中の金入にはいつて居りました金を残らず鼻紙の上へあげまして、此方へまはりまして、竹「正介どん。正「あんだ、水でももう一杯上げやうか。竹「なに水はよいが、これはね、失禮だよ、失禮だが、こゝにたつた二分二朱ある、これだけが今日の持合せ、と云ふといつもはもつと澤山ある様だが、ないのも不思議さ、甚だすくない、恥かしいが私の志、あゝして何不自由もない菱川先生の坊さまがあんな形、いえそんな事をいつては失禮だが誠にお願いしたい、そこで是は私が坊さまの事を思ひ出して、涙をこぼしたからその涙賃、いえ何うかこれで、七月も近いから着物の一枚も買つて上げて下さい。正「いやそれはおめえ様よしなさい。竹「いえさう物堅く出られると困るよ、誠に少し、たつた二分二朱、竹六先の旦那さまへの御恩返し、またお前の忠義は實に不思議、それだから納めて置いておくれ。正「いやお前さん、金なんぞ貰つては濟まねえ。竹「まア〜取つて置きなさい、それでは人の親切を無にするのだ。と辭退をいたしますから、二分二朱無理におつゝけました。竹「もう片陰が大分出來たから、それでは肝心の榎のお乳をおもらひ申すのだ。と、うがひなどを遣ひまして、榎の下へいつて見ますと、流行るとは申しますが、かゝる邊土のことでございますから、お宮といつたつて小さな物で、杉かなどで拵へたお札箱の

様なお宮で、扉の内に何かお札の様な物が有つて前に御幣が一本立つてをります。是御神體で……竹六は柏手を打ちまして、竹「南無白山大權現はらひたまへ清め、いやこゝは寺の境内だから、神道ぢやアあるめえ、正介どん此のお寺は何宗旨だえ、え、なに、淨土宗、そんなら、ランガボキヤアベエロシヤナア南無白山大權現様〜眞與島の御新造の腫物立所に平癒いたします様に、天下泰平國土安穩商賣繁昌息災延命家内安全、災難を遁れ福を何卒授かりますやうに、ランガボキヤア……なんど、一心に拜みまして、例の竹の筒へ榎の乳を受けまして、正介に暇を告げ、赤塚を出ましたのは八ツ頃でもございませうが、急いでやつて來ましたから、丁度灯ともし頃に、柳島へ歸つて參りました。竹「へい、竹六只今歸りました。

三十三

浪江は竹六の歸へりますのを待つて居りましたから、浪「お、竹六か、御苦勞〜、さぞ暑かつたらう、さア〜まア肌でも脱いで涼んで、それから向ふの話聞かう。竹「いえ道で日が暮りましたから、思ひのほか涼しうございました、晝は恐ろしい暑い所で、何だといつて大根畑ばかりあつて、木といふ物がござりませぬ所ですから、ちつとも蔭なし、實に汗びつしよりの衣類濡らし、……いやそん

な事はよいが、御新造様は如何、少しはお痛みが去つた方でいらつしやいますか。浪「左様さ、今日
 はまづ大出来の方で好かつたが、日暮から又痛むといつて、あの通り呻つてをるよ。さうして乳はも
 らつて来てお呉れかえ。竹「へい大貫ひ、これでございます、此の竹筒の方へ入れて参りました、御
 新造さま早く召上れ、直にお癒りで、不思議ださうでございます、へい随分大きな榎の木で、その前
 に棚が釣つてありまして、其上に癒つた人がお禮に上げたといふ、矢張り竹づつほうへ入れた乳が名
 前が書いて上つてをりますが、江戸から態々願懸に行くものがあるさうで、名前を讀んで見ると小網
 町だの、橋町だのといふのが澤山あります。外に土器へ絞つて上げる人もございますさうで、その土
 器はちぎ門の脇の茶屋で賣つて居りますが、其處に貴方あの正介が……いえ、何正々直さうな親父が。
 と終口走りましたから、竹「さア御新造お早くお頂きなさい。など、瞞かしましたが、日頃から心に
 懸る正介のことゆゑ、浪江はハツと胸へ當りまして氣になります。浪「いや流行神といふものは利く
 利かないに關らず、自と人氣がそこへ寄るものだから、鯛の頭も信心柄とやらで、此方の心さへ通じ
 ればそれはきつと利益のある物で、え早く頂くがよい、なに氣味が悪い、なにそんな事はない、竹六。
 竹「へい。浪「今、お前が正と云ひかけたが、一昨年駈落を致した下男の正介は元は練馬在の生れで、
 髓か赤塚とか申したが、彼が故郷ゆゑ、若しや正介が其處に居つて逢ひでも致しはしないか。竹「え

なに正介殿に、なに逢ひません。浪「逢はなければそれでよいが、あいつが故郷は髓か赤塚と聞いて
 をつたから、よい逢はなければ。竹「なに逢ひませば何もお隠し申しはしません。だが御新造、さて
 お乳を上れ、直に驗が見えます、私がそれに一生懸命にお願ひ申して來ましたから、御願が利きま
 す事は竹六お請合、其替りにすつぱり好くおんなすつてお禮参りといふ時は、私は是非御案内旁
 旁お供でござりませうね、其節は御褒美に、それ、いつかほしいと申し上げたお帷子でも御帯でもど
 ちらか頂戴、かう兩天秤を引懸て置けば大丈夫、ハ、ハ、旦那さまお大事に、左様ならまた明日、お
 休み遊ばせ。と飛んだ事を口走つたと思ひますから、餘計な世辭をいつて、竹六は口を押へて淺草田
 原町の我家へ歸りました。後で浪江は疵持つ足でございますから、今竹六が正介と云ひかけて止した
 のは、何でもあいつ正介に逢つたに違ひない、我悪事の片腕をいたした老爺、あいつを生かして置い
 ては枕を高くは寝られぬ、何うか致して根を斷ち葉を枯らして安堵したいものだと思ひましたが、佞
 奸の浪江少しも色には出しませんで、おきせの枕元へまわり、浪「何うだな、腫物がさう痛むのは、
 それは吹切るからそれで痛みが烈しいのであらう、折角竹六が親切に貰つて來て呉れたのだから、こ
 の乳を、なるほど、飲むは氣味が悪からう、尤もだ、それぢやア筆の先か何かで痛む所へ付けるがよい。
 きせ「はい有難う存じます、誠に夕方から別段に痛みが烈しい様で、實に堪へにくい程でございます

す、それでは其の乳を。浪「己が付けてやらう、畫筆が柔かくてよいからと。浪江は件の貰つて参つた乳を畫筆の先へ付けまして、浪「いやこれは痛さうだ、眞赤になつた。然しこれは最う直にふつきりさうだ、總別頭のない腫物は悪い物としてあるから、中々苦しいものださうだが、辛抱も今夜なもので、膿さへ出ればけろ〜とよいから我慢をしな。と乳を付けて其晩は浪江も眠りに就きました。が、おきせも乳を付けましたせぬかして、宵にはすやく〜眠ります鹽梅だから、夜伽などを致します下女や雇女などは悦びまして、次の間へ来て皆寝てしまひました。…これより重信の祟りでおきせがいよ〜苦しみまして、終に浪江の手に掛り非業な死を遂げますといふ、雀の怪談のお話は明日の事にいたしませう。

三十四

扱、毎度連中が怪談〜と申しますお話をよく申し上げますが昔と違ひまして、唯今は小學校へお通ひなさいますお六つかお七つぐらゐのお子様方でさへ、怪談だの幽霊だのといふ事はない、落語家は嘘ばかり吐くとおつしやるさうでございますが、決して幽霊がないと限つた譯もないとやら、これらは凡て理外の理とか申して學問上の議論で押付けるばかりにもゆかぬ。これは餘計な事で、早速

本文に掛りまするが、おきせは彼の竹六が赤塚から貰つてまゐりました乳を痛み所へつけましたので、鯛の頭も信心がらとやらで、あゝ有難いと思つたから神経が納まつたと見えまして、すやく〜と眠りますので、浪江をはじめ夜伽をいたします者も悦びまして、皆枕に着きました。が、夜明方からまた痛み出して來たと見えまして、おきせはうん〜と申して傍らに寝てをりました浪江を揺り起しまして、きせ「貴方、ちよつとお起き遊ばして下さい、もしあなた、お眼を覺まして下さい、誠に痛んでなりませんからよ…あなた。といひます聲も息苦しく揺り起しますから、浪「あゝいよ今起るよ、うるさい、己だといつて少しは眠らなければ體がつゝかないよ。きせ「それでも大層痛んでまゐりますから、心細くつてなりません、どうぞ眼を覺まして下さいまし。浪「さう揺すぶつてはいけんよ、今起きるよと云つたら、靜かにせんか。と仕方がないから床の上へ起返りました。浪「また痛んで参つたのか。きせ「はい誠に宵の口は、あの乳をつけたせぬでしたか痛みが薄らぎまして、勞れて居りますからうと〜といたしました。もう怖いおそろしい夢を見ましてから又大層痛んで、貴方何卒其の手拭を取つて下さいまし。浪「手拭…おゝこれか、これは少し濡れてをるよ。きせ「いえ、それは私の汗で、これ御覽じませ、こんなにびつしより汗をかきまして…。浪「おゝこれは恐ろしい汗だ、お久を呼んで單物を着替るがよい、お久〜。と下女を呼びますから、おきせは、きせ「あな

た、お待ちなさい、幸ひ誰も傍に居りませんから、只今見ました夢を。浪「何だえ、今見た夢を、いけんよ、そんな夢なんぞを氣にしては却つて病に障るから決して氣にかけぬがよい。きせ「いえ／＼氣にかけずには居られませんが、只今ばかりではございません。毎晩痛みが烈しくなつて熱が出て参りますと、枕元へ先の夫重信が。浪「しいツ、これさ靜かにいひな。と浪江は邊へ心を配ります事で、「重信先生が何ういたした。きせ「もうそれは恐ろしい顔をして、私を恨めしさうに睨めまして。浪「いけんよ、それはお前が始終先の御亭主の事を思つて心に忘れぬから夢に見るのだ、最早只今となり何と致したとて歸らぬ旅へ赴かれた先生とつて返しが出来ないから諦めるがよい。きせ「いえそれは諦めて居りますが、あなた、私がこんなに苦しみますのも、今考へて見ますと、五年前に夫が留守中にあなたが私へ何んなさいました時、あゝいふわけになり、間もなく落合とやらで非業な死を遂げ、まだ百ヶ日も濟みません中にあなたと夫婦になりましたのは一生の過り、せめて一周忌でも経ちましてからにいたせば宜かつたと思ひます、私がこんな業病を煩ひますのも、皆夫重信の祟りではございませんかと、夢を見ますにつけて何うも然う思はれてなりません。浪「又始まつたよ、つまらん事は云ひつこなしさ、何も先生を私と二人でとも邪魔になるから殺して、さうして夫婦になつたといふ譯ぢやアなし、ちやんと竹六に、それは内密は兎に角も表向ちやんと、眞面目で師匠の跡へ直

つたのだから、先生が悦ぶとも恨む氣遣なしだ。きせ「それでもあなた、只今なんぞは夫重信が血だらけになりました。浪「え、血……どうも女といふものは愚痴で困るよ、それは人手にかゝつて切られて死んだから、血だらけにもならうぢやアないか。きせ「まア貴方お聞きなさいまし、さうして青い顔をいたして、眼の中が血走つて、もう／＼何とも申されない顔をいたして、私の髻をとつて引倒しまして、この犬畜生め、よくも己を落合の堤で殺したな、汝にも思入れ苦痛をさせねばならん。といつては打擲をいたしますが、その恐ろしさ、いつでも夢が覺めますと汗をびつしより掻きました、それにこの腫物の中にかう何か居りますやうで、私の思ひますには雀でも居つてお腹の臟腑を嘴で突ツつきます様で、その痛い事は何とも申されません、あゝ痛い、これはあなた、痛んでまゐりました、あれ／＼大層雀が來まして。浪「なに雀が何所へまゐつた。

三十五

きせ「あれ雀が大層來ました、あゝ腫物を突ツついて何うも痛んで、アレア、……浪「これ雀が何所へ参つた、なに家の中へ雀が何んで参るものか、馬鹿を云つてはいかんよ、そんな謔語をいふのは熱が強いからのせいで、氣を落著けて少し我慢をしてゐるがい。きせ「いえ／＼熱のせいでござい

ません、ほんたうに雀がチウ／＼申して腫物を嘴でつつきます。浪「いや／＼何かで突つつかれる様に思ふが、それは今ふつきらうといたすので、それで疼くのだらう、雀などではない、馬鹿を云はずに夜がもう直に明けるから、それまで辛抱しな、コレさうセツ／＼と申したつて癒りはいたさん、却つてハツ／＼と思ふと餘計に痛みが増すものだ。と浪江はおきせを後から確かり抱いて、看病いたしてをりますが、おきせは「いえ／＼かう苦しみますのも、夫重信の百ヶ日も濟まない中に、貴方と夫婦になつた罰でございませう、とろ／＼といたすと夫の姿がどうも眼に着いてをりまして。浪「いえそれは氣のせぬだ、假令師匠が人手にかゝつて非業な死をお遂げなすつたとて、どうかいたしてその敵を捜し出して、敵討をいたしたいと思ふ念は、是迄一日も忘れた事はない、己だつて其の位に思ふものを、何で先生がお恨みなさる筈がないわ、よいか、それだから夢にだつて恨みを仰しやるのではないぞ、それは禮に、なに手前が病氣見舞にな……お出でなすつたのぢや。などと瞞かして力をつける所が痒／＼つてなりません、一寸見て下さい。浪「よい／＼見てやらう、どれ／＼。と浪江はおきせが痛がつてをります乳の下を見ますと、三寸計りかう座取つて、硝子の様に腫れ上つてをりますから、あゝこれは痛さうだ。だがこれは痒い／＼と先刻から申すから、中が全て腐つてをるのだ、これはい

つそ膿を出したら痛みが去るかも知れん。きせ「私も左様存じます。」「だが醫者の參る迄ももう少しの辛抱ぢやから待つがよい、滅多な事を素人了簡でいたして、萬一の事があつては後で取返しが付かんから。きせ「いえお醫者様のお出でまで待たれません、何卒あなた小刀かなんかで突つついて下さいまし。浪「どうも困るな、そんな荒療治は出来ん、我儘をいつては困るよ。きせ「いえ此通りぶく／＼いつてをりますのですから、切れば直に膿が出て痛みが去りませう、あなた早く／＼。と急ぎ立てます。浪「よい、それでは己が切つてやらう、だが少しは痛からう、我慢をいたせ。と枕元に有ります脇差を取りまして、小柄を抜き、左の手でおきせを確かり押へして、小柄の尖をもつてかの腫物を突かうといたしました、何ういふ手先の狂ひであつたか、左の乳へかけまして五六寸も深く切り込みました。おきせは「あつ。といつて反返りましたが、不思議や、其の疵口から血交りの膿が逆り、それと一緒に白緑色の異形な鳥が顯はれましたから、浪江は現在女房の乳の下深く手が狂つて突込んだので悔りいたした所へ、又もや疵口から鳥が飛出したので、はつと思ひ呆氣にとられて、暫しの間呆然といたして見てをります内に、小さい鳥と思ひましたのが、見る間に忽ち鳶ぐらゐな鳥になりました、浪江の頭上を目がけ、嘴を尖らして突つつく有様に、浪江は「畜生／＼。と有合せました棕櫚箒をとつて追散らしましたが、件の鳥は風のごとくふわり／＼と手ごたへがいたしませんか

ら、浪江は箒をもつて縦横へ振廻し、鳥を追ひ廻しますが、形は目に見えても手應がないから、唯畜生くんと申して箒を振廻しますばかりで、これを餘所目で見ましたら箒を持つて獨で踊つてをります様で、さぞ可笑しい事でございます。浪江は餘り箒を振廻しましたので、がっかりし、勞れてそこへどつと倒れまして、浪「誰か居ないか、水を一杯くれ、あゝ苦しい誰か」。と嘔鳴りますので、勝手に寝てをりました看病人はじめ下女も眼を覺まして、其處へ駈けつけて見ますと、これは如何に、おきせは乳の下より膿が出て、うんと戻りまして虚空を掴んで齒をくひしぱり、舌を嚙んだと見えまして口から血を流して死んでをります。浪江は箒を持つたまゝ勞れ切つて倒れてをるといふので、駈けつきました看病人と下女は驚いたの驚かないのといつて、旦那様に御新造がた……倒れてどうしたら好からう、と、うろくいたしてをるといふ、終におきせは重信の祟りで落命いたしました、これより浪江がふらくと逆上を致して赤塚へ参り、己と死地に入るといふ、五才の眞與太郎が親の敵を討ます一段は、今一回でいよいよ讀切と相成ります。

三十六

おきせが死んだと聞きまして、扇折の竹六は飛んで参りまして、竹「へい竹六でござい、借旦那様

申し上げ様もない次第で、御新造様が御急變でいらつしやつたつて、實に驚き入りました、御愁傷なんどといふことは通り越して、本當に夢でございませう、昨日赤塚から貰つた乳を私が上げた時、竹六や御苦勞だつたね、嘸途中が暑かつたらうね、と仰しやつたお聲がまだ半分許り耳に残つてをります。などと悔みを申してをりましたが、浪江は悪人でも首つたけ惚れて居りますおきせが死んだので、少し取逆上せたと見えまして、彼の正介の事を竹六が口走つたのが、氣になつてなりませんから、早速おきせの死骸を棺へ納めまして、温氣の時分だからといつて、直に菩提所へその夕方に埋葬をいたして内へ歸つて参り、其晩は態と竹六を内へ泊らせまして、翌朝竹六を自分の居間へ呼びました。竹「へい旦那、さぞお勞れでいらつしやませう、然し、御葬式も御都合よく済みまして御安心さまで。浪「大きにお前お骨折で、いやお前とは久しい馴染だが、先生の葬式から引續いて坊の死んだ時、また今度の不幸にも種々厄介を掛けると云ふのもこれは何かの縁で、時に一昨日赤塚からお前が歸つた時、正介に逢つたと云ひ掛けたが、あれは本當に逢つたのかえ。竹「へえなに正介には。浪「いや、隠してくれては却てお前の爲にはならない。先生の遺子の眞與太郎を攫つて逐電致した不忠者、居所が知れては打捨て置かれぬ奴、逢つたら逢つたと有體に云つてお呉れ、若し隠立てをするなら、お前も正介と同類故、據なく斯う致すから。と刀を捻くりますから、竹「いえ申します申

します。と竹六も浪江の眼の色が變つてをりますから危険ゆゑ、實は是々云々と、赤塚で正介に逢つた事を申しましたから、それでは片時も捨て置かれぬ、と自分の悪事の顯れ小口でございませうから、直に竹六を案内に連れて浪江は赤塚へ起きました。お話は二つに分れまして、赤塚の正介は今日は七月十二日、お精靈さまのお出での日だといふので、お迎ひ火といふやつを焚いてをります。正「さア坊さま、お前も今年は五つだから、少しは物心もつく時分だが、かうやつてお迎ひ火イ焚くもおめえ様のお父さまがお精靈様に成つて來なさるから、さアお念佛を云はつしやい。と佛壇から線香の煙で煤つた白木の位牌を持つて來まして、坊ちやま是がおめえの父さまだよ。眞「なに己の爺さまお前だア。正「勿體ねえ、おれは草履取だア。眞「草履取だ、草履取たア何の事だア。正「草履取たア履物を取る事つたア。眞「それぢやア坊の草履を取るかの。正「まアそんなものだが、これ、よく聞かつしやいよ、お前様の父さまは浪人こそなすつたが、元は三百五十石取つた立派なお武士で、晝えお好きなばかりで朋輩の嫉みを受けて、菱川重信といつて終に畫師に成られたが、器量好しの御新造持つたのが身を亡す瑞相で、五年前の六月六日の晩に落合で磯貝浪江といふ悪人の爲に殺された、其時ア己餘儀なく悪人の加擔して濟まねえから、お前さまア殺せと言ひ付かつたのを、幸に、この赤塚へ隠れてお前さま成人させ、どうかして親の敵を討たせてえとお前が脊丈延るのを待つてゐただ、え

えか、今にも其の浪江といふ奴に出會したら、この刀で横腹抉つて父さまの仇ア討たんければなんねえ、えゝか、此の刀アお前様を角笥の十二社の瀧壺へ打ち込めつていつた時、大威しにさして來た生くらで、こんなに錆てゐるだが、此方が一生懸命なら是だつて怨は返えせる、己が助太刀するから親の敵をえゝか、南無阿彌陀佛。と麻幹をくべて今念佛を唱へてをります。此方の窓から覗きました磯貝浪江はづか／＼と入つて參つたから、正介は恠り致したが、一方口の事故逃げる所がない、浪江は上り框に片足踏みかけ刀の柄へ手をかけまして、浪「珍らしや正介、己が悪事を隠さん爲に、此浪江を敵と視ふなどは片腹痛し、いで小兒諸共眞二つに致しくれん。と居合腰に體を縮めて刀をすらしと抜き、汝つ。と眞向に振上げましたが、葺下しの茅葺家根ゆる内法が低いから、切先を鴨居へ一寸計り切込んでがちり。正介は逃端を失ひましたから一生懸命。正「坊ちやまそら敵だツ。と佛壇にあつた陶器の香爐を取つて浪江へ打付けましたから、灰は左右へ散亂して浪江が兩眼へ這入つたゆゑ、あツといつて思はず眼を塞ぐ、刀は鴨居へ切込んであるから體を屈めて取らうと致せど、邊は灰神樂で少しも見えませんから、追の浪江も少し慌て、脇差を抜かうといふ所へは氣が付きません。此方の正介は爰ぞと思ひまして有合した櫛の木心張棒で滅多打に腰の番の所を三ツ四ツ喰はした。不思議や此時まだ五歳の眞與太郎でございますが、宛ら後で誰かゞ手を持添へてくれますやうに、例

の鑄刀を持ちまして、眞「お父さんの敵思ひ知れ。と高らかに呼びまして、浪江が横腹へ突込み一
抉りに抉つたから何かはもつて堪るべき、浪江はアツと苦しみ立ち竦みといふ奴で、あゝとそれへば
つたり倒れたから、正介は南無阿彌陀佛くくくと念佛を唱へながら、滅多打に押し懸つて擲ちまし
たから、終に浪江の死骸は顔も何も分らぬやうになつたとやら申します。丁度これは實曆の六年七月
十二日の暮合の事で、早速此邊はお代官支配でございますから、手附衆の御検視が參つて浪江の死骸
を改め、一通りお尋ねが有つて正介眞與太郎は名主預けになり、法の如くお咎めを受けましたが、正
介は後に髪を剃りまして廻國に出て亡き人々の回向を致し、眞與太郎は五才で親の敵を討つたのは珍
らしいと、舊秋元家へ十五才に成つたら歸參させやうと御奉書を賜はり、遠縁の者が引取りまして世
話を致す事になり、此のお話はまづ今日で千秋樂と相成りました。永らくの間お目を拜借いたして世
退屈でございましたらう。

(據松永魁南筆記)

卷末小記

◇三遊亭圓朝は天保十年四月一日江戸に生る。父は二代目三遊亭圓生の門人橋屋圓太郎。七歳の春、小圓太と名のり初めて江戸橋の寄席に出づ。後圓生の弟子となり十
七歳にして圓朝と改名、二十歳にて鳴物嘶を初め、二十一歳頃より専ら新作のみを
演ず。近世の人情嘶、落語の名人として名聲いよいよ高く、その多くの作品は上演
せられ、又その口演の速記は新聞に連載されて好評を博した。明治三十三年八月十
一日、六十二歳にて長逝。

◇眞景累ヶ淵は安政六年二十一歳の作。

◇怪談牡丹燈籠は二十三歳頃の作、速記の出では明治十七年四十六歳の時。

◇鏡ヶ池操松影は明治二年三十一歳の作、速記の出では明治十八年。

◇怪談乳房榎、何年の作か不明、「東京繪入新聞」に連載され明治二十一年單行本とし
て出版さる。

好 評 大 衆 讀 物

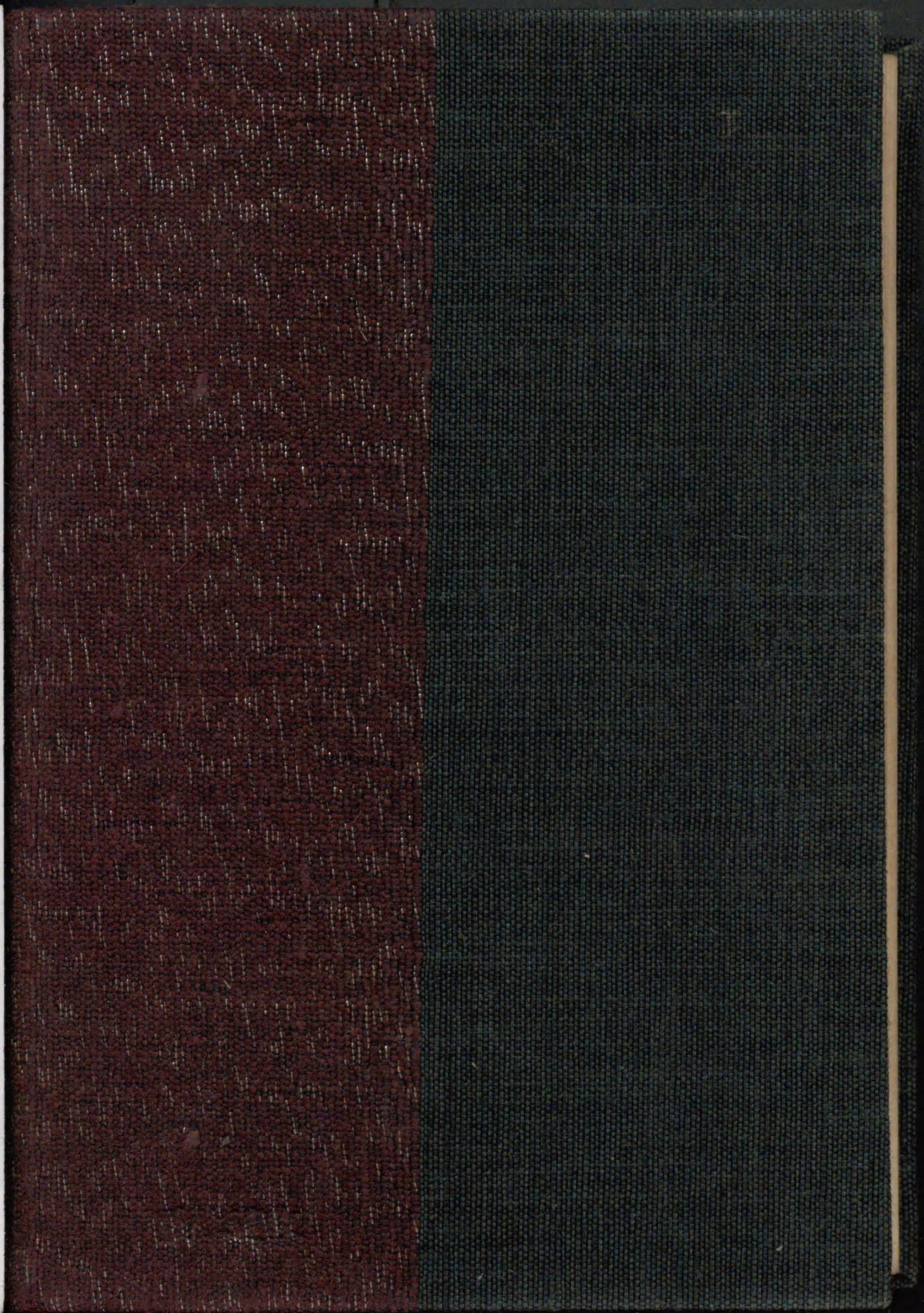
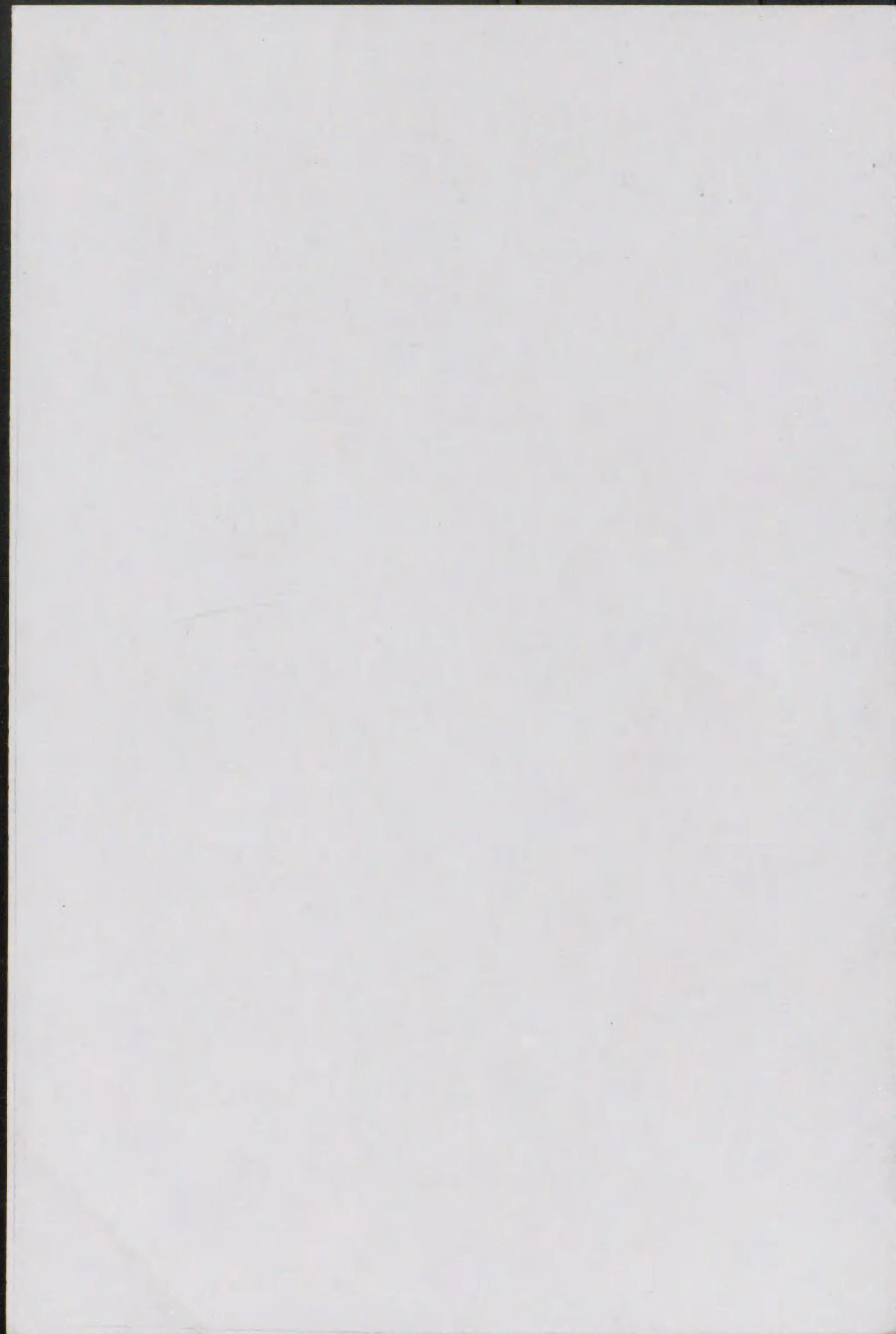
松	國	菊	刺	大	明	由	か	こ	赤	圓
五	定	五	青	政	治	井	ら	ろ	穂	朝
郎	忠	郎	判	奉	建	正	す	つ	浪	怪
鴉	治	格	官	還	設	雪	組	き	士	談
		子	官	還	設	(前・中)	(前・後)	船	(上・中・下卷)	全
		子	官	還	設			(下卷)		集
		子	官	還	設					上
子	子	子	長	矢	木	大	大	大	大	三
母	母	母	谷	田	村	佛	佛	佛	佛	遊
澤	澤	澤	川	挿	毅	次	次	次	次	亭
寛	寛	寛	仲	雲	著	郎	郎	郎	郎	圓
著	著	著	著	著		著	著	著	著	朝
										著
送	送	送	送	送	送	送	送	送	送	送
定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定
料	料	料	料	料	料	料	料	料	料	料
價	價	價	價	價	價	價	價	價	價	價
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
二	四	四	八	二	二	四	二	二	二	二
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

改 造 社 發 行

2625



Faint, illegible text visible through the paper from the reverse side of the page.

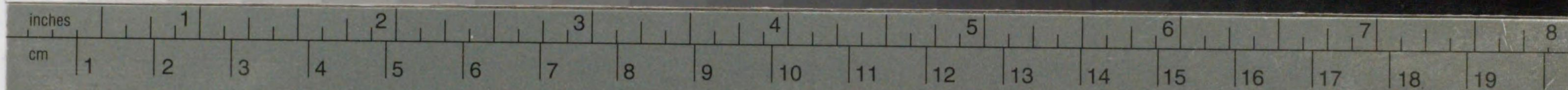


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

